兵庫県文化財調査報告　第 391 冊

揖保郡太子町所在

沖代遺跡

－一般県道網干停車場新舞子線道路改良事業に伴う発掘調査報告書－

2011（平成 23）年 3 月
兵　庫　県　教　育　委　員　会

沖代遺跡

兵庫県文化財調査報告　第391冊
兵庫県教育委員会

22教Ⓣ1-019A4

沖代遺跡

－一般県道網干停車場新舞子線道路改良事業に伴う発掘調査報告書－

2011（平成23）年3月

兵　庫　県　教　育　委　員　会

例　　言

1．本書は兵庫県揖保郡太子町沖代に所在する沖代遺跡の発掘調査報告書である。

2．沖代遺跡の調査は、兵庫県西播磨県民局県土整備部光都土木事務所が計画・施工する一般県道網干停車場新舞子線道路改良事業業に伴うものである。

3．確認調査は平成19年度に種定淳介・深江英憲が担当した。本発掘調査ともに兵庫県教育委員会が実施した。

4．本発掘調査は、平成21年度に渡辺　昇が担当した。

5．調査で使用した方位は国土座標第Ⅴ系を使用し、水準は兵庫県光都土木事務所設定の３級基準点を使用した。

6．基準点の測量は調査委託者から松浦興業㈱に委託して実施した。遺物出土状態や土層断面図は調査員・調査補助員が実測した。

7．遺構写真は調査員が撮影した。図版１の空中写真は国土地理院撮影のものを使用した。

8．整理作業は、平成22年度に兵庫県立考古博物館で行った。

9．執筆は科学分析以外を渡辺が行い、編集は八木和子・高橋朋子の協力を得て渡辺が行った。

10. 本書にかかる遺物や図面・写真などの資料は、兵庫県立考古博物館（加古郡播磨町大中1－1－1）ならびに兵庫県立考古博物館魚住分館（明石市魚住町清水立合池の下630－1）に保管している。ご活用ください。

11. 発掘調査･整理調査にあたって、地元関係者をはじめ多くの方々･機関のご協力･ご指導を得ました。感謝致します。
（敬称略・順不同）
太子町教育委員会・三村修次・海野浩幸・藤木　透・市村高規

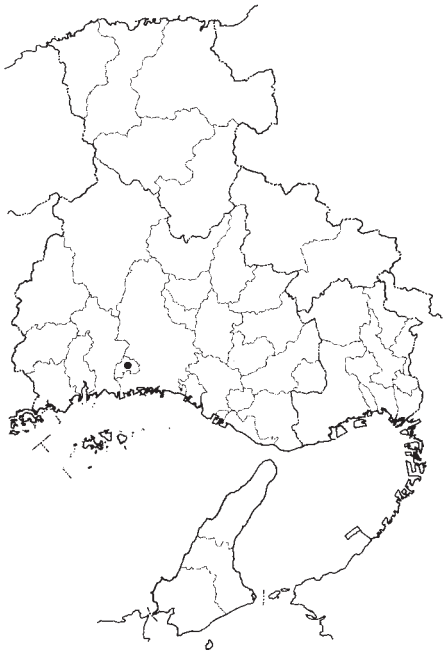


図１　太子町の位置

本文目次

例言

Ⅰ　はじめに …… 1
　　1．調査に至る経緯
　　2．本発掘調査の経過
　　3．整理作業の経過

Ⅱ　位置と環境 …… 3

Ⅲ　調査結果 …… 7

Ⅳ　出土遺物 …… 16

Ⅴ　沖代遺跡出土土器の胎土分析 …… 27

Ⅵ　おわりに …… 34

挿図目次

図１　太子町の位置 …… i
図２　調査風景 …… 1
図３　整理作業風景 …… 2
図４　確認調査と本調査の位置 …… 2
図５　鵤石田遺跡出土土器 …… 3
図６　丁山頂からの景色 …… 3
図７　黒岡神社古墳 …… 4
図８　沖代遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 5
図９　斑鳩寺 …… 6
図 10　第１面平面図 …… 7
図 11　南壁・東壁土層断面図 …… 8
図 12　第１面遺構実測図 …… 9
図 13　SB01 実測図 …… 10
図 14　SH01 実測図 …… 11
図 15　SH02 実測図 …… 12
図 16　第２面平面図 …… 13
図 17　第２面遺構実測図 …… 14
図 18　出土土器実測図 (1) …… 17
図 19　出土土器実測図 (2) …… 21
図 20　出土土器実測図 (3) …… 22
図 21　出土土器実測図 (4) …… 23
図 22　出土土器拓本 …… 24
図 23　出土鉄器実測図 …… 25
図 24　出土石器実測図 …… 26
図 25　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度 …… 30
図 26　胎土中の砂の粒径組成 …… 30

図27　砕屑物・基質・孔隙の割合 …… 30
図28　太子町教育委員会調査状況 …… 34

表目次

表1　沖代遺跡周辺の遺跡 …… 4
表2　石器計測表 …… 26
表3　胎土分析試料一覧および胎土分類 …… 27
表4　薄片観察結果 …… 29

写真図版目次

写真図版1　沖代遺跡周辺空中写真（国土地理院撮影）
写真図版2上　第1面全景（東から）
　　下　第1面全景（西から）
写真図版3上左　耕作痕・粘土採掘坑検出状況
　　上右　機械掘削風景
　　中　SD01（南から）
　　下左　SD01アゼ（南から）
　　下右　SD01（北から）
写真図版4上　SD02（北から）
　　下　SD02東肩部土器出土状態
写真図版5上　SD02（南から）
　　中左　調査風景
　　中右　SD02南壁
　　下左　SD02調査風景
　　下右　SD03（南から）
写真図版6上左上　SK01（南から）
　　上左下　SK01アゼ（南から）
　　上右上　SK02（南から）
　　上右下　SK02アゼ（南から）
　　下左上　SK03（南から）
　　下左下　SK03須恵器出土状態（南から）
　　下右上　SK05（南から）
　　下右下　P24断ち割り（南から）
写真図版7上　SH01（北から）
　　下左上　SH01アゼ（北から）
　　下左下　SH01アゼ（南から）
　　下右　SH01床面土器出土状態
写真図版8上　SH02（南から）
　　下左上　SH02アゼ（南から）
　　下左下　SH02調査風景
　　下右上　SH02東辺土器出土状態（西から）
　　下右下　SH02炉跡断ち割り（南から）
写真図版9上　SH03・SX01（東から）
　　下左　SH03・SX01（北東から）
　　下右　SH03炉跡断ち割り（北から）
写真図版10上　第2面全景（東から）

中　東壁
下　南壁断ち割り
写真図版11上左　包含層製塩土器出土状態
上右　地元説明会
下　調査風景
写真図版12　出土遺物(1)
写真図版13　出土遺物(2)
写真図版14　出土遺物(3)
写真図版15　出土遺物(4)
写真図版16　出土遺物(5)
写真図版17　出土遺物(6)
写真図版18　胎土薄片

Ⅰ　はじめに

１．調査に至る経緯

沖代遺跡は兵庫県揖保郡太子町沖代に所在する遺跡である。国道２号は時間的に渋滞することが多く、特に太子竜野バイパス終点のたつの市揖保町門前付近は慢性的な渋滞となっている。その解消手段の１つとして交通量の分散が検討された。兵庫県龍野土木事務所では一般県道網干停車場新舞子線道路事業が計画された。

計画に伴って龍野土木事務所から調査依頼があり、すでに周知の埋蔵文化財包蔵地である沖代遺跡（兵庫県遺跡番号450218）が存在するので調査の必要性が考えられていた。調査は兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部企画調整班、種定淳介・深江英憲が担当した。平成19年８月20日に坪５カ所の確認調査を行い、そのうちの３Gで遺構と包含層が検出されたことから、３Ｇを中心とする部分約180㎡について本発掘調査の必要が生じた。

２．本発掘調査の経過

平成21年度に本発掘調査を実施した。規模が小さく、工事を急ぐ必要があることから、年度当初に兵庫県西播磨県民局光都土木事務所（龍野土木事務所）の直接執行として調査を実施した。調査は光都土木事務所からの依頼で調査員を派遣して実施した。５月11日から５月20日までの実働８日間を費やした。調査は兵庫県立考古博物館担当者が行った。

調査事務　兵庫県立考古博物館
　　館長　　石野博信
埋蔵文化財調査部長　　若生晃彦
企画調整班　調査専門員　種定淳介
　　主査　　小川弦太
　　調査第１班　主任調査専門員　吉田　昇
調査担当　調査第１班　担当課長補佐　渡辺　昇
作業委託　㈱前田組

図２　調査風景

３．整理作業の経過

整理作業は平成22年度に単年度事業として、兵庫県西播磨県民局光都土木事務所と委託契約を交わして実施した。平成22年度に水洗い作業から報告書刊行までの作業を兵庫県立考古博物館で行った。

調査主体　兵庫県教育委員会
調査事務　兵庫県立考古博物館
　　館長　　石野博信
埋蔵文化財調査部長　　若生晃彦
　　主幹　　吉田　昇
総務課　　課長　　前川浩子
　　事務職員　川原聡介

整理保存課	課長	村上泰樹
	担当課長補佐	岡田章一
	主査	篠宮　正・山本　誠
調査担当	担当課長補佐	渡辺　昇
	嘱託員	八木和子・高橋朋子・吉田優子・島村順子
保存処理	主査	岡本一秀
	嘱託員	長濱重美・前田恵梨子・浜脇多規子・桂　昭子

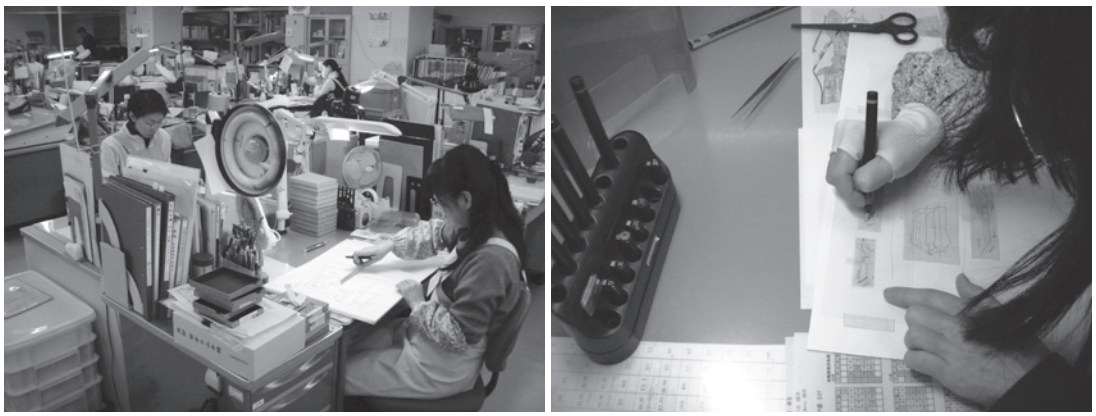


図３　整理作業風景

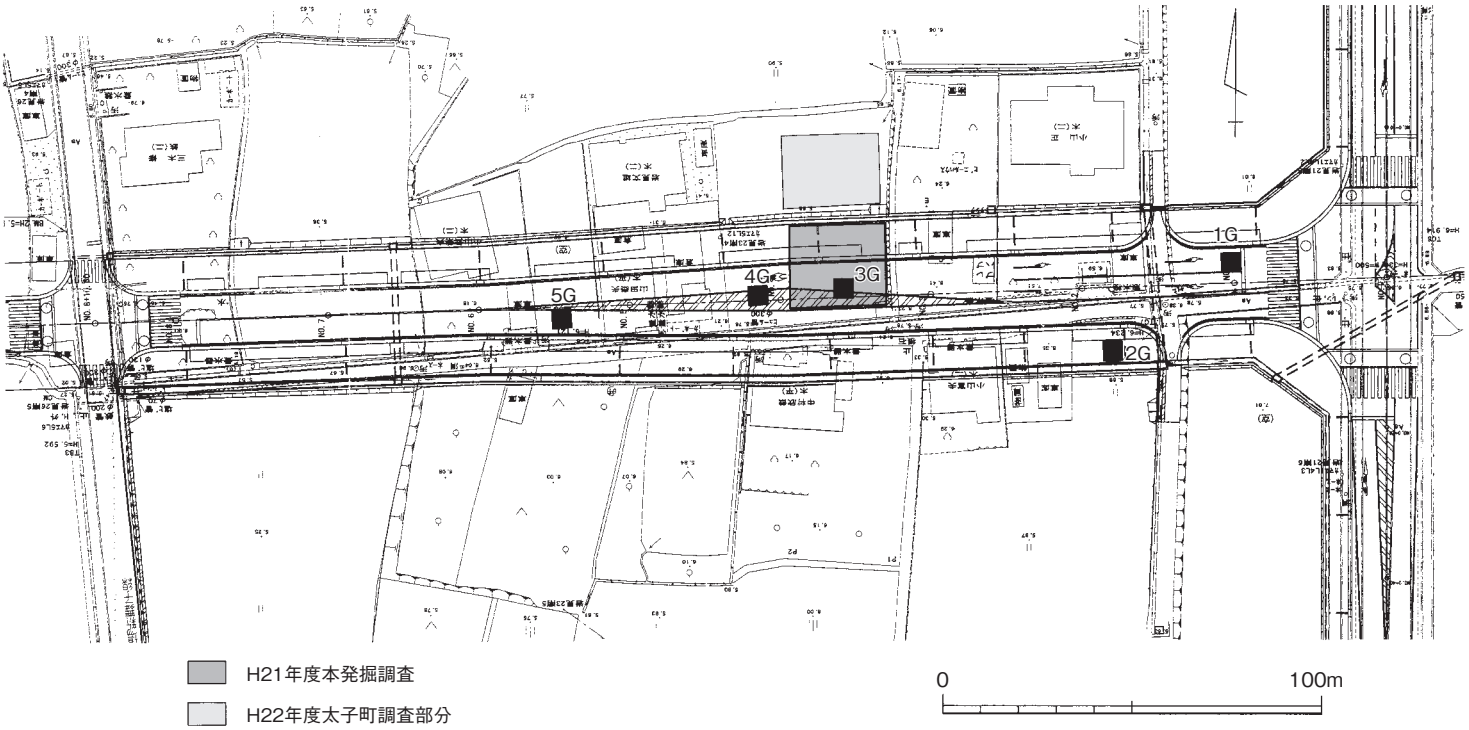


図４　確認調査と本調査の位置

Ⅱ　位置と環境

沖代遺跡は揖保郡太子町沖代に所在する遺跡である。太子町の中心部の平野南部に所在している。この平地は揖保川の最大の支流である林田川と独立する小河川である大津茂川に挟まれた沖積平野であり、法隆寺領鵤荘の範囲として知られている。荘園域は推定されているだけでなく、荘園絵図が残されている。さらに境界を示す傍示石が現地で確認できることなどから、全国的にも代表的な荘園遺跡とされている。法隆寺領鵤荘の南側に遺跡は存在する。独立丘陵が多数存在するものの、全体的に地目は水田である。揖保川をはじめとする河川の氾濫源となっており、旧河道や洪水堆積物によって地形は構成されている。

旧石器時代の遺跡は南側の揖保川対岸のたつの市御津町碇岩所在の碇岩南山遺跡でまとまって層的に出土している。太子町域では播磨特有の溜池から単独出土例が多く知られている。広坂向池遺跡・原新池遺跡・北山池遺跡・下山池遺跡などである。他に坊主山遺跡などで有舌尖頭器が出土している。たつの市皿池遺跡では姶良火山灰層が検出されている。

縄文時代になるとたつの市揖保町片吹遺跡で前期の土器が出土しており、後期にかけて集落が営まれている。竪穴住居跡も検出されている。太子町では東南遺跡が後晩期を中心とする集落跡で数回の発掘調査で埋甕や配石墓・土壙墓が検出されている。土偶も１点出土している。焼土や被熱した礫群も確認されており、居住域も墓域に接して広がっていそうである。丁柳ケ瀬遺跡も中期から晩期の土器が出土している。立岡遺跡・常全遺跡では埋甕が確認されている。晩期の土器を出土する遺跡は比較的太子町では多く、弥生前期につながっていくことは明らかである。

弥生時代になると遺跡数は増加する。縄文晩期の土器を持つ遺跡は継続している。さらに福地相坂遺跡、枝重・助久遺跡や太子町の弥生時代拠点集落と考えられる平方遺跡・斑鳩寺遺跡が加わる。丁柳ケ瀬遺跡では前期の土器がまとまって出土しており、合わせて木器特に赤彩された精製鉢は優品である。大津茂川流域に遺跡は多いが、太子町域全体に遺跡は広がっている。中期になると川島遺跡、川島川床遺跡、鵤遺跡、鵤石田遺跡、上構遺跡、亀田遺跡、山田峠遺跡、檀特山遺跡が加わる。川島遺跡は西播磨の当該期の編年が行われた遺跡で、後期前半を欠くが古墳時代まで継続する遺跡である。早い時期の方形周溝墓の調査例として知られている。瀬戸内海東部を代表する遺物である分銅形土製品が鵤遺跡・亀田遺跡・山田峠遺跡から出土している。後期前半の遺跡が少ないのは太子町周辺の特徴である。後期

図５　鵤石田遺跡出土土器

図６　丁山頂からの景色

図７　黒岡神社古墳

表１　沖代遺跡周辺の遺跡

№.	遺跡名	所在地
1	沖代遺跡	揖保郡太子町沖代
2	吉福	揖保郡太子町吉福
3	吉福西	揖保郡太子町吉福
4	福地相坂	揖保郡太子町福地
5	上構遺跡	揖保郡太子町岩見構上
6	真砂遺跡	たつの市揖保町真砂
7	権現山古墳群	たつの市御津町中島　他
8	中島上吉氣遺跡	たつの市御津町中島字上吉氣
9	小丸山古墳群	たつの市御津町中島字山王
10	朝臣古墳群	たつの市御津町朝臣字上ノ山
11	苅屋遺跡	たつの市御津町苅屋字荒神田
12	宮ノ西ラ遺跡	たつの市御津町苅屋字宮ノ西ラ
13	古網干遺跡	姫路市網干区垣内南町
14	魚吹津構跡	姫路市網干区宮内
15	坂出遺跡	姫路市網干区坂出
16	和久遺跡	姫路市網干区和久
17	高田区整遺跡	姫路市網干区高田
18	関ノ口遺跡	姫路市網干区和久
19	鍛冶田遺跡	揖保郡太子町糸井鍛冶田
20	福地宮ノ前遺跡	揖保郡太子町福地宮ノ前

№.	遺跡名	所在地
21	蓮常寺西遺跡	揖保郡太子町蓮常寺西ノハナ
22	蓮常寺北遺跡	揖保郡太子町蓮常寺一宮
23	蓮常寺東遺跡	揖保郡太子町蓮常寺下坪
24	立岡笹山	揖保郡太子町立岡
25	朝日山北遺跡	揖保郡太子町糸井朝日山
26	朝日山城跡	姫路市勝原区朝日谷
27	朝日山古墳群	姫路市勝原区朝日谷
28	檀特山古墳群	姫路市勝原区下太田
29	矢田部城跡	揖保郡太子町矢田部才ノ上
30	矢田部遺跡	揖保郡太子町矢田部才ノ上
31	立岡東遺跡	揖保郡太子町立岡大町
32	立岡南遺跡	揖保郡太子町立岡山崎
33	立岡山古墳群・遺跡	揖保郡太子町立岡立山
34	立岡遺跡	揖保郡太子町立岡山ノ下
35	老原遺跡	揖保郡太子町老原北畑
36	常全日蓮寺遺跡	揖保郡太子町常全日蓮寺
37	常全遺跡	揖保郡太子町常全後畑
38	阿曽南遺跡	揖保郡太子町阿曽五反田
39	鵤石田遺跡	揖保郡太子町鵤石田
40	東南遺跡	揖保郡太子町東南佐田

図８　沖代遺跡の位置と周辺の遺跡（１：25,000）

末になって特徴的なことは庄内甕が出土することである。姫路平野南部の船場川流域と太子町周辺で顕著に出土している。沖代遺跡でも出土しており、他に上構遺跡・鵤石田遺跡・鵤遺跡・斑鳩寺遺跡・上太田茶屋ノ前遺跡・亀田遺跡・丁柳ケ瀬遺跡でも出土している。特に上構遺跡・鵤石田遺跡では非常に高い率で出土している。逆に同時期の土器が多く出土しているのに川島遺跡では全く出土しないという興味深い出土状況を示している。

太子町には独立丘陵が多く、北側を中心とした周囲の山塊も含めてここに墳丘墓が築かれている。揖保川右岸の養久山が著名であるが、多くの遺跡が存在している。檀特山・立岡山・黒岡山・松尾・広坂と姫路市域の山戸・朝日・丁にも多く築かれている。

丁にはバチ形前方後円墳である丁瓢塚古墳が山裾に古い古墳として構築される。同時期の古墳は尾根上にも見られる。太子町では佐用岡の松田山古墳が前期古墳である。岩盤を刳りぬいた墓壙に竪穴式石室を設けている。神獣鏡・筒形銅器・銅鏃・鉄剣・鉄鏃・鉄斧・玉類が副葬されている。武器が多いのが特徴である。黒岡山古墳は主体部が箱式石棺であるが、だ龍鏡・鉄鏃などを持つ前期古墳である。檀特山は尾根上にあり前方後方墳という数少ない墳形である。揖保川対岸の揖西町は墳丘墓から続く養久山古墳群に前期古墳が築かれ、尾根続きの西側龍子三ツ塚や鳥坂古墳群にも前期古墳が認められる。さらに南側の権現山古墳群にも複数の前期古墳があり、51号墳のように前方後方墳も複数存在する。

図９　斑鳩寺

Ⅲ　調査結果

２面の遺構面を確認した。第１面は古墳時代から近代までの遺構である。近代は耕作痕と土坑群である。耕作痕は東側で顕著に検出されており、おもに南北方向に鋤溝が走っている。三日月形の耕作痕も多数確認している。時期は近世から近代と思われる。

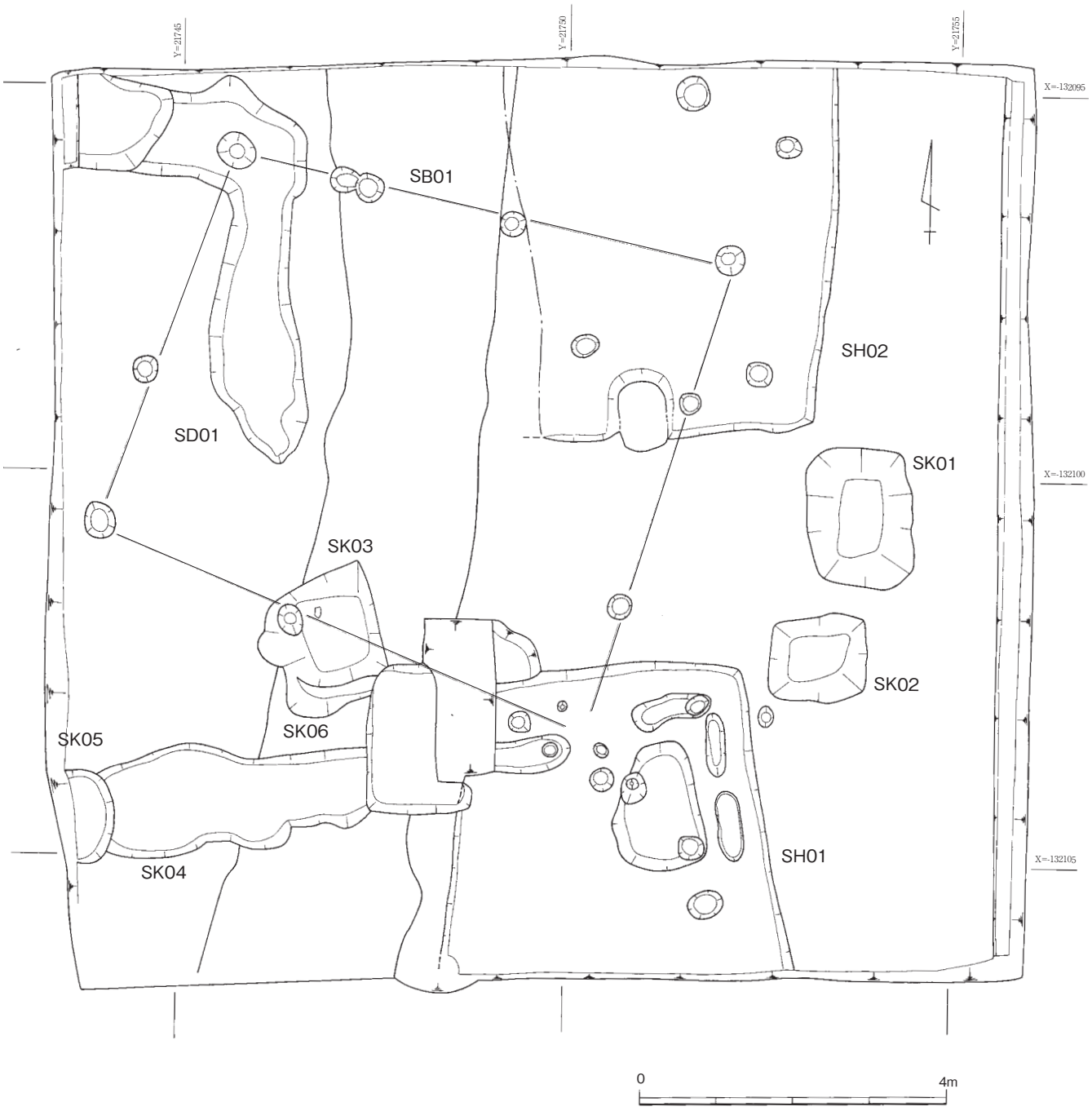
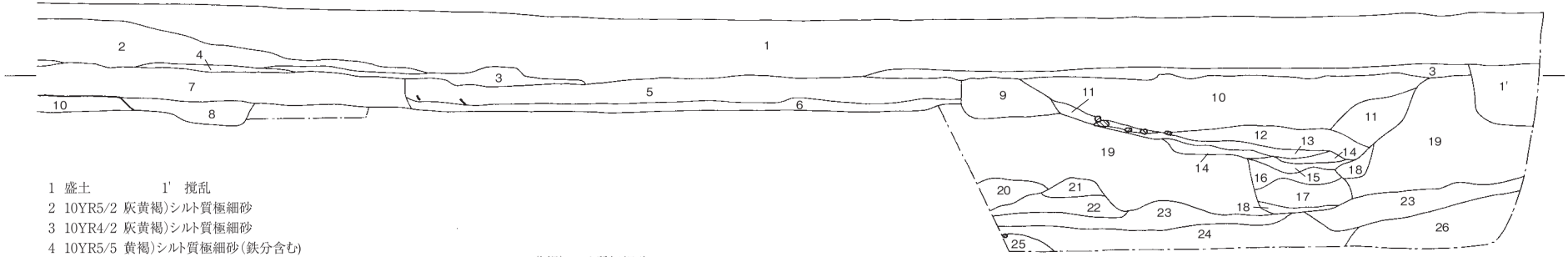


図 10　第１面平面図



1 盛土　　1' 撹乱
2 10YR5/2 灰黄褐)シルト質極細砂
3 10YR4/2 灰黄褐)シルト質極細砂
4 10YR5/5 黄褐)シルト質極細砂(鉄分含む)
5 7.5YR3/2 黒褐)シルト質極細砂(マンガン含む･SH01埋土)
6 7.5YR3/3 暗褐)シルト質極細砂(SH03埋土)
7 10YR3/3 暗褐)シルト質極細砂
8 7.5YR3/1 黒褐)シルト質極細砂(地山ブロック含む･SX01埋土)
9 10YR2/3 黒褐)極細砂(マンガン含む)
10 10YR4/4 褐)シルト質極細砂(マンガン含む)
11 10YR4/3 にぶい黄褐)極細砂(10層混じる)
12 10YR2/3 黒褐)中砂
13 10YR3/3((暗褐)中砂(円礫多く含む)
14 10YR4/1 褐灰)シルト
15 5YR3/2 暗赤褐)シルト質極細砂
16 7.5YR3/3 暗褐)シルト質極細砂
17 10YR4/2 灰黄褐)シルト質極細砂(粘性強くマンガン含む)
18 10YR5/3 にぶい黄褐)シルト質極細砂(19層2次堆積土)
19 10YR5/3 にぶい黄褐)シルト質極細砂
20 10YR5/4 にぶい黄褐)シルト質極細砂
21 10YR3/2 黒褐)極細砂(マンガン含む)
22 2.5Y5/2 暗灰黄)シルト質極細砂(炭･土器･21層ブロック含む)
23 2.5Y5/3 黄褐)シルト(鉄分含む)
24 2.5Y4/3 オリーブ褐)シルト(鉄分含む)
25 2.5Y4/4 オリーブ褐)シルト質極細砂(炭･鉄分含む)
26 円礫層
27 4層と7層の混ざった層
28 7.5YR3/2 黒褐)シルト質極細砂(マンガン･土器含む･遺構埋土)
29 28層と同じ遺構だが色調淡い
10YR3/2 黒褐)～10YR3/3 暗褐)
30 10YR4/1 褐灰)極細砂(マンガン含む)
31 2.5Y5/3 黄褐)極細砂(マンガン含む)
32 10YR4/6 褐)シルト質極細砂(地山)

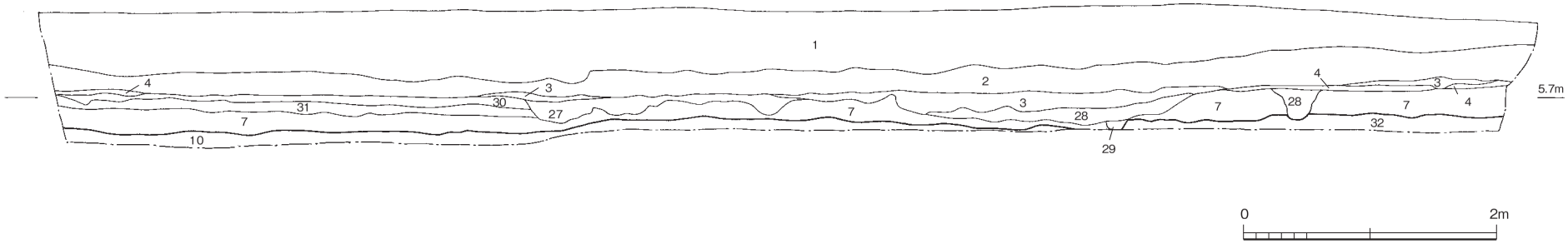


図11　南壁・東壁土層断面図

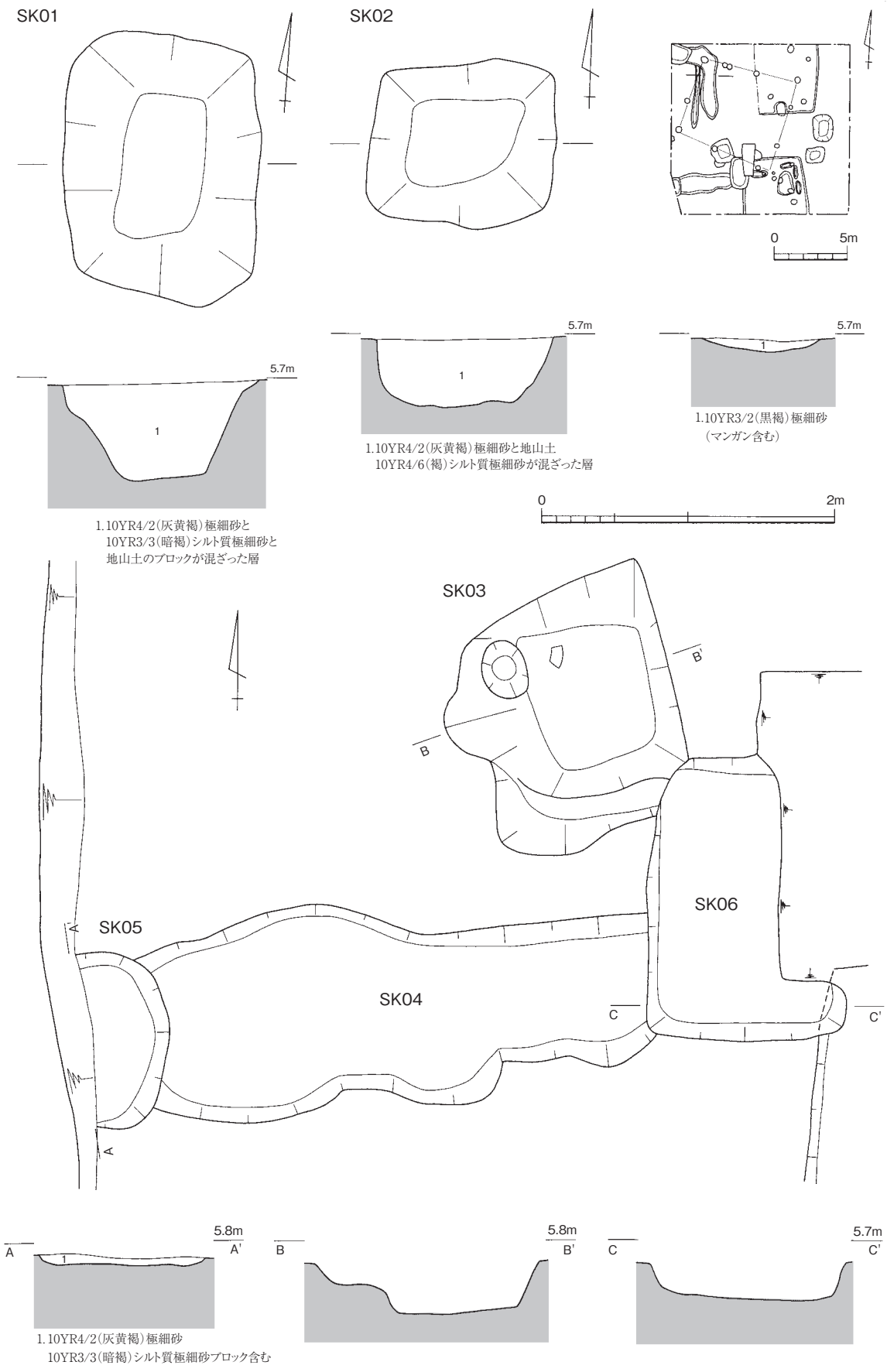


図 12　第 1 面遺構実測図

図 13　SB01 実測図

土坑は粘土採取のためのものと思われ、検出した土坑６基のうち３基（SK01・02・06）が確実にそれに該当する。時期もいくら遡っても近代かと思われ、現代に近い可能性も高い。深さはSK01が、大きさはSK06が大きい。SK01は1.7m×1.35mの隅円方形で深さは0.65mを測る。SK02は東西1.3m、南北1.1mの方形で深さ0.6mを測る。SK06は北東部分を確認トレンチで切られているが、東西1.4m、南北2.0mの北側が丸い釣鐘状をしている。深さは0.3mである。SK04は溝状の遺構で東西に長く、東側をSK06に切られている。南北1.2 ～ 1.4mで、西側は自然消滅するように浅くなっている。最も深い部分でも0.1mと浅く、多くは5㎝前後である。図上でSK05に切られたように表しているが、SK05の範囲を明らかにするためであり、実際はSK04の方が上で新しい遺構である。SK03は南東隅をSK06に僅かに切られて

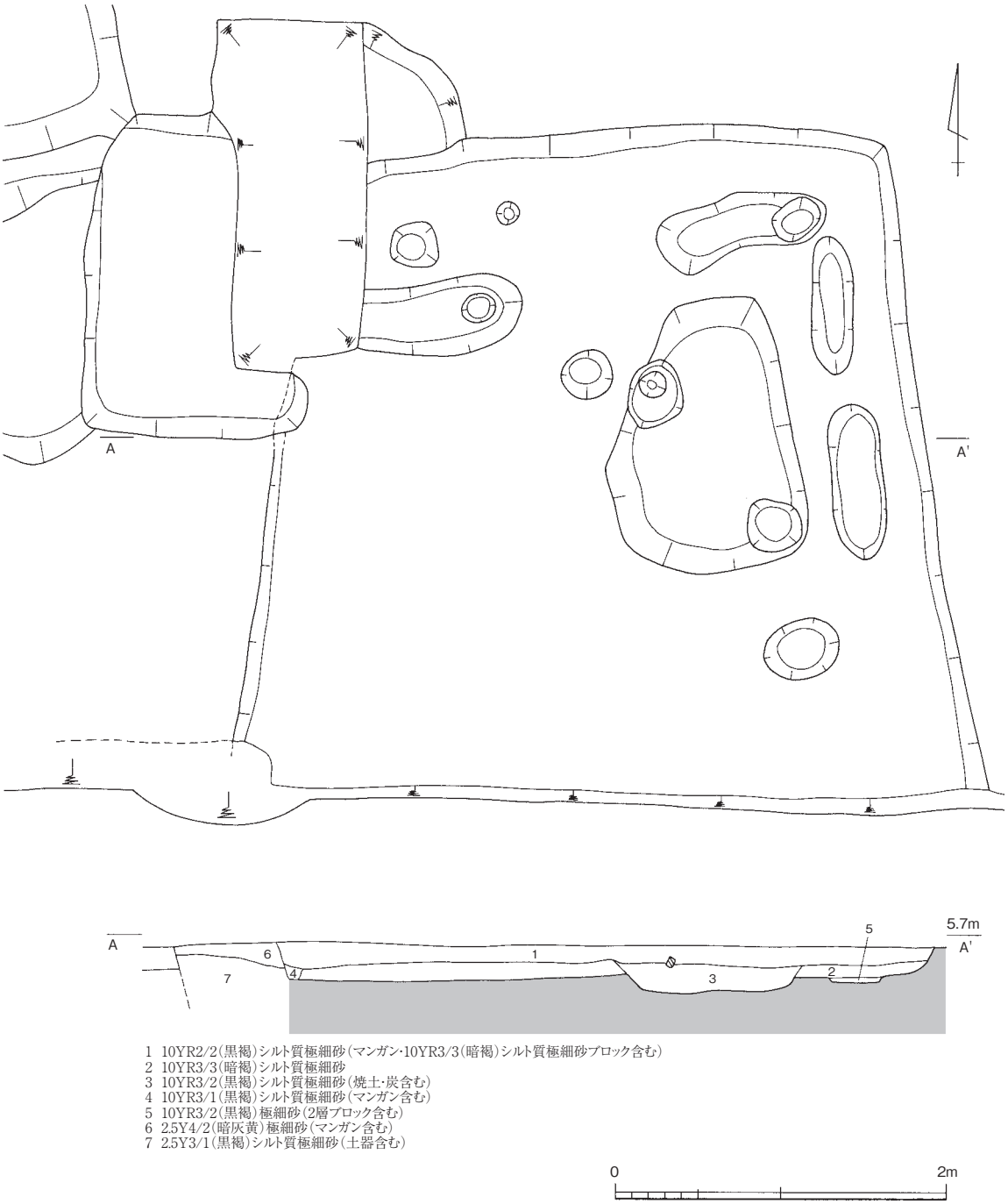


図 14 SH01 実測図

いる。主軸を5°西に振っている。南北1.4m、東西1.2mの方形プランで、深さ0.4mを測る。全体が垂直に掘り込まれているのではなく、北辺と東辺以外は２段に掘り下げられている。土坑内から須恵器片が出土しており、古墳時代後期の土坑と思われる。SK05は調査区の壁沿いで検出した小型の土坑で、東側をSK04に切られている。南北1.2mの半円形をしており、深さ0.1mを測る。

溝は調査区北西で２条確認している。南北に走るSD04は耕作に関する遺構と思われる。幅0.3 ～ 0.4mで深さは0.15m前後と浅く南北方向に直線に延びている。SD01は直角に曲がる溝であるが、時期・性格は明らかでない。最大幅1.3m、深さは0.2mと浅く断面形状はレンズ状である。

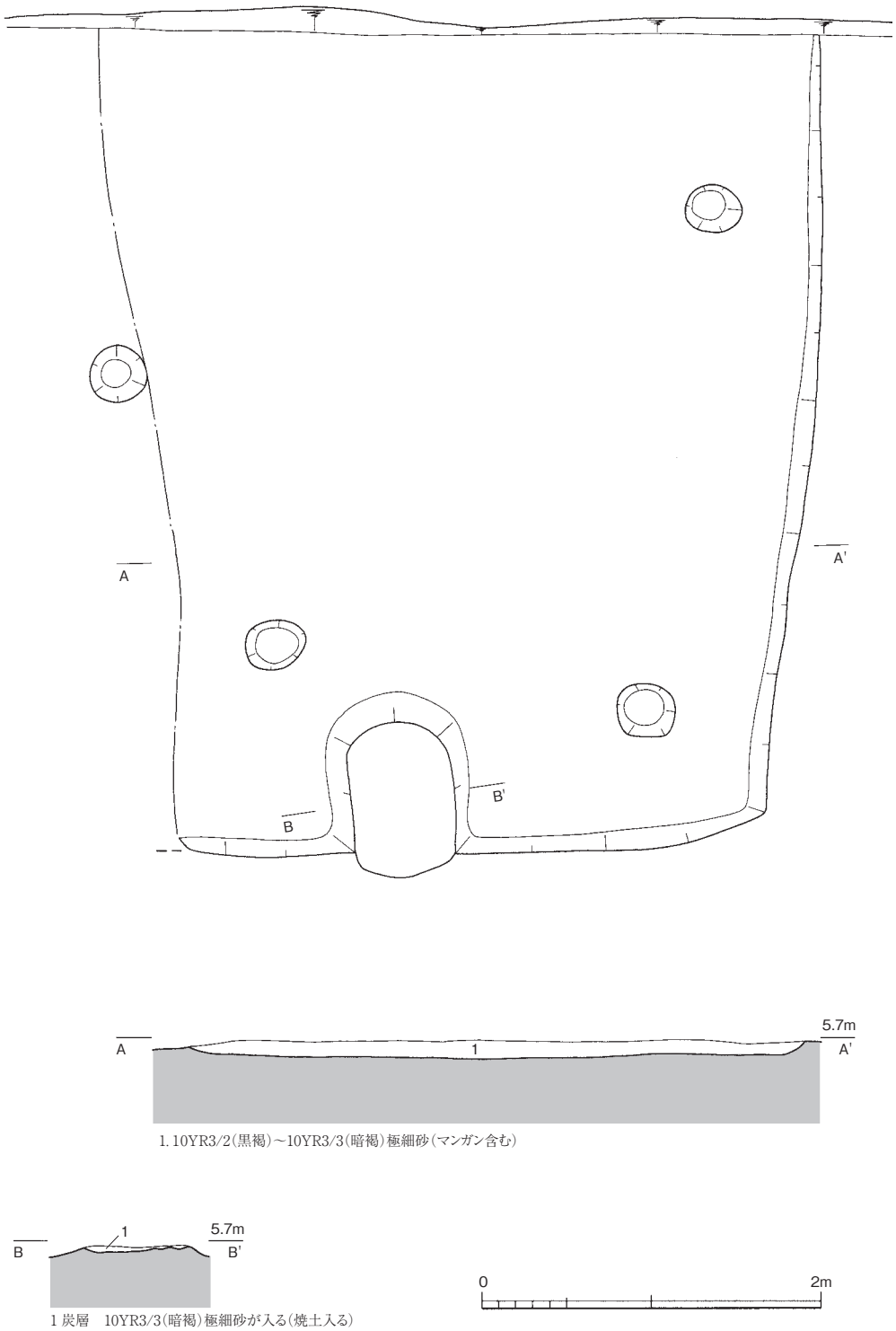


図 15　SH02 実測図

掘立柱建物跡（SB01）はSD02が埋まってから築かれているが、後世の削平などで残りは悪い。N15° Eの東西棟で、東西6.7m、南北5.4mである。古墳時代後期以降の建物であるが時期は確定できないものの、規模や埋土から中世ではないかと思われる。

竪穴住居跡は2棟検出している。溝SD02の下段埋没時期の後に構築されたと思われる。SH02は埋没後だが、SH01は微妙な時期で確定できない。SD02の上段は溝として機能していなかったかもしれない

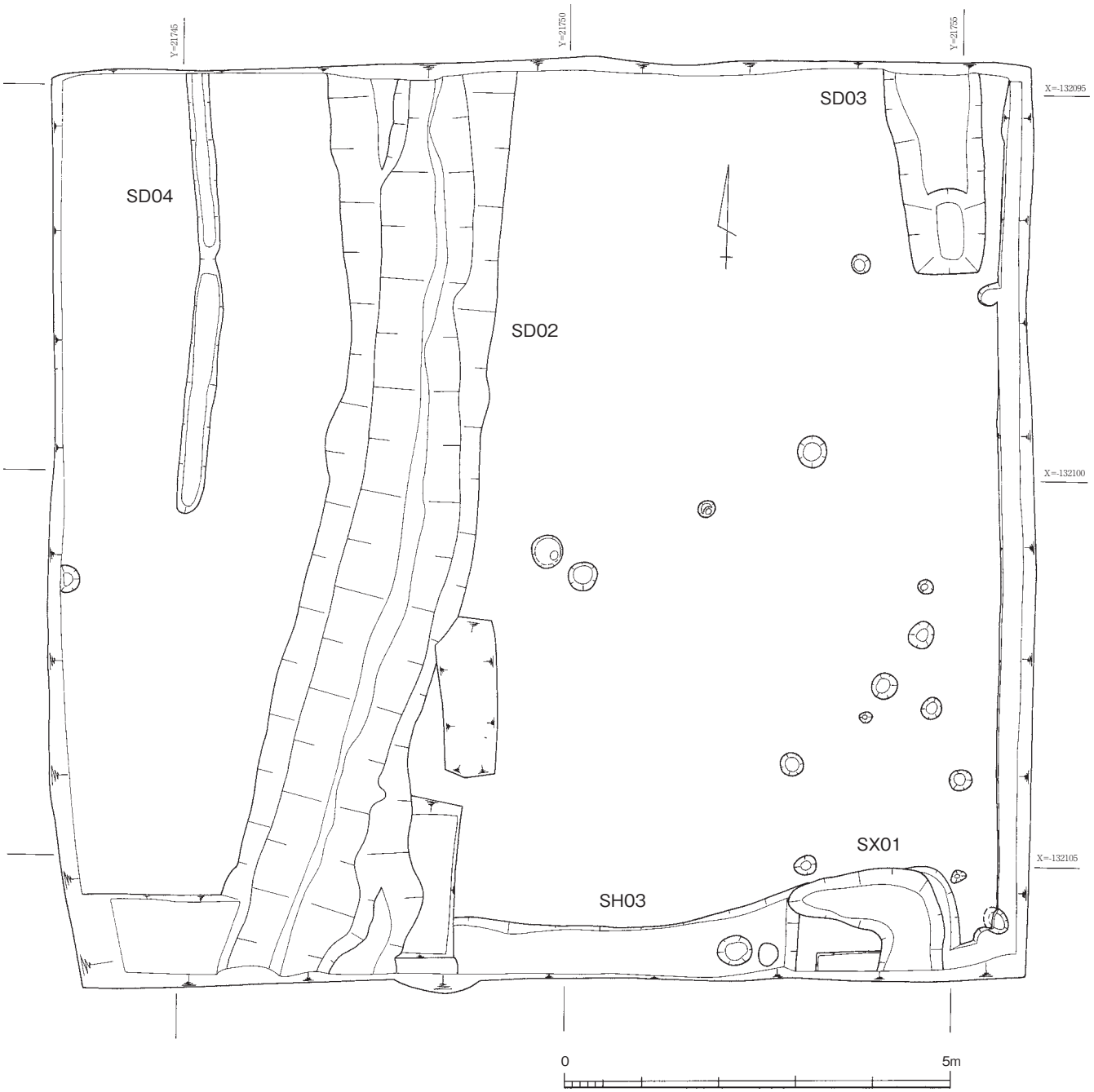
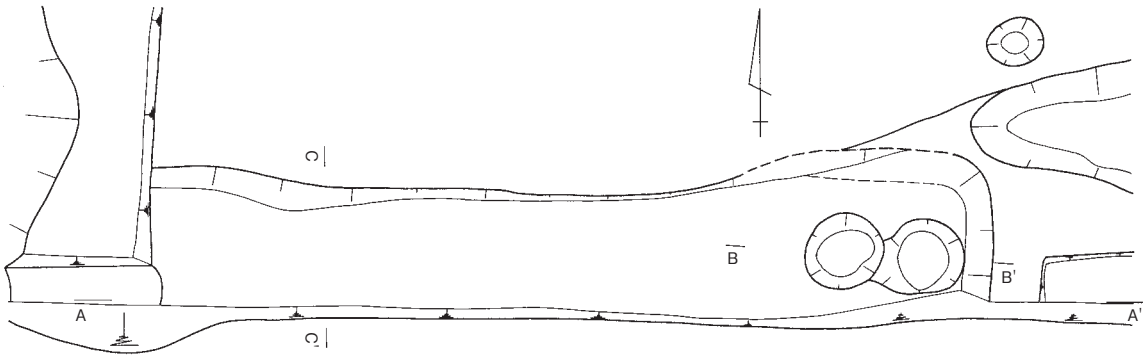
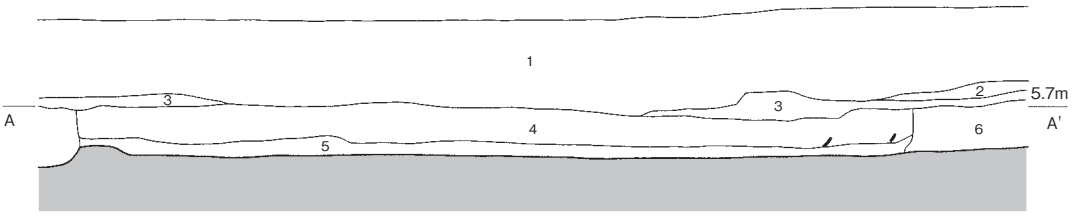


図 16　第２面平面図

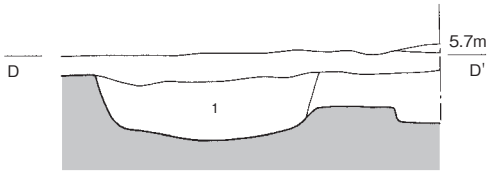
が、落ち込み状に凹んだ状況であったと思われる。SH01は南側一部が調査区外に延びている。１辺4.5ｍの方形プランの住居跡で、４本柱であろうと思われる。壁溝は認められない。壁の残りは最大で0.2ｍで、悪いところは数cmしか残存していない。床面に溝・土坑を検出している。中央に近い位置の土坑は最大長1.6mで深さ0.14mを測る。北側の方が深くなっている。中央土坑で炉跡ではない。溝は壁と方位が同じで内側に離れて回っている。弥生時代末頃と思われる。SH02も方形プランで残存状態はさら



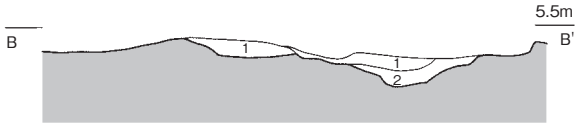


1 盛土
2 10YR5/2(灰黄褐)シルト質極細砂
3 10YR4/2(灰黄褐)シルト質極細砂
4 7.5YR3/2(黒褐)シルト質極細砂(マンガン含む･SH01埋土)
5 7.5YR3/3(暗褐)シルト質極細砂(SH03埋土)
6 10YR3/3(暗褐)シルト質極細砂

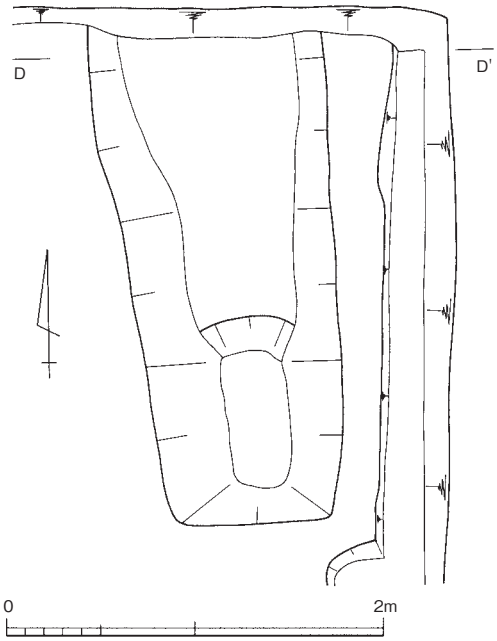
0 2m



1 10YR4/4(褐)シルト質極細砂



1 焼土
2 10YR3/2(黒褐)極細砂(マンガン含む)



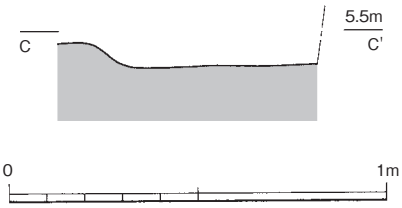


図 17　第２面遺構実測図

に悪い。壁溝は確認されておらず、壁も5～10㎝しか残っていない。東辺は4.5m調査しているが調査区北側に続いている。西側は削平され残存しておらず、4mまで調査している。南辺中央に焼土面があり、炉跡と思われる。中央にあるとすれば１辺5mになる。出土遺物から古墳時代前期おわり頃である。

第２面は縄文時代晩期から古墳時代の遺構で溝２条と竪穴住居跡１棟、落ち込み１基、ピット10数基を確認している。溝SD02は大形の溝で上面の幅は2.8mで深さ0.6mの半円形の断面をしている。さらに中央部が幅0.8m、深さ0.4mの箱形に掘られている。北半は直線状に延び南半は多少曲がっている。生活域を分けるなど意味深い溝と思われる。掘削時期は弥生時代後期で埋没時期は古墳時代後期であるが、下段は弥生時代末から古墳時代はじめに埋没したと思われる。

遺構面では弥生時代中期以降の遺構しか確認されていないが、溝ではさらに下層で縄文時代晩期の包含層を確認した。遺構面でも念のため一部断ち割り調査を行ったが遺構は確認されなかった。下層の礫層は洪水堆積物で、縄文時代晩期以前の洪水によって出来たものである。それ以降は礫層が堆積する大きな洪水堆積は認められない。

Ⅳ　出土遺物

SH01出土土器（1 ～ 28）

28 点図化しているが、破片が多く全体的に磨滅しているものが多い。壺は 7 点あり、2 点だけ二重口縁壺である。(1) は口径 11.9cmと小型で外反し端部角張っている。明瞭な稜線を持たずに肩に続いており。残存高 4.6cmを測る。ユビ成形からナデで内面に絞り目が残る。外面灰白で内面浅黄橙を呈し、クサリ礫を含んでいる。(2) は外傾する頸部から大きく直線的に開き端部は肥厚する口径 19.75cmの口縁部である。端面に 2 条の凹線を持ちヨコナデで仕上げる。浅黄で残存高 4.6cmを測りクサリ礫を含む。(3) は外反する口縁部で端部僅かに肥厚し角張る。ハケ整形ののち強いヨコナデで仕上げる。端面に 1 条の凹線があり、口径 19.8cm、残存高 3.4cmを測る。浅黄～浅黄橙でクサリ礫含む。(4) は残存端が粘土の継ぎ目で二重口縁かもしれない。緩やかに外反し端部尖りぎみに丸く納める。ヨコナデ仕上げで口径 16.0cm、残存高 2.75cmである。(5) はくの字形の頸部でユビ成形が顕著である。外面橙で内面明黄褐で僅かに砂粒含む。ナデ仕上げで有機質が付着している。(6) は大きく屈曲する短い頸部は外反し、擬口縁部は突出してから内傾する。外面にぶい橙で内面浅黄橙を呈する。讃岐からの搬入品と思われる。(25) も二重口縁壺で讃岐からの搬入品と想われる。粘土接合面で剥離しており、器台のように見えるが、口縁端部を欠くもので内傾するものであろう。にぶい黄橙～橙で砂粒を僅かに含む。ユビ成形からヨコナデである。

甕は 14 点である。(7) は僅かに外反し端部がやや強く反る。端部は丸く納めている。にぶい黄橙～橙で口径 14.65cmを測る。(8) は内傾する体部から短く外反する口縁部で端部は角張る。ユビ成形ののちナデを施し、頸部外面には整形痕が残っている。口径 13.8cm、残存高 5.2cmで口径より最大腹径がだいぶ大きくなる。(9) は外傾する口縁部で口径 14.0cmで端部は尖る。ユビ成形からナデののちヨコナデ仕上げ。内面浅黄を外面浅黄橙を呈する。(10) の内面は斜め方向から横方向のヘラケズリで、外面は右上がりのタタキである。タタキ上げてから口縁部を折り曲げて形成している。口径は 16.5cm、残存高 6.0cmを測り、最大腹径は口径より僅かに大きい。内湾する体部から外反し端部尖っている。頸部内面はヘラケズリによって鋭い稜を持っている。口縁部はナデからヨコナデ仕上げ。クサリ礫を含み、内面黒、外面灰黄である。(11) は僅かに内湾する体部から短い頸部を有したのち内湾する布留傾向を強く持つ甕である。外面はタタキで縦方向に近い。口径 19.0cmでクサリ礫を含んでいる。端部は内湾する端面を持ち尖りぎみである。灰白を呈する。(12) は外反しているが端部を欠く。頸部は強いヨコナデで凹んでいる。外面はハケ整形でのちにナデ仕上げ。橙で壺の可能性もある。

(13) ～ (20) は底部である。(13) は底部再成形で指圧痕が見られる。底径 4.5cmで丁寧な仕上げ、外面は塗彩しており壺と思われる。(14) (15) は平底、(16) (20) は上げ底、(17) は尖り底、(18) (19) は丸底である。(15) ～ (17) はタタキ成形で、(17) は格子状に底までタタキ尖らしている。(14) (20) には黒斑がある。

(21) ～ (24) は高杯ですべて杯部のみである。(21) は椀形で端部丸く杯部は完形、脚部との接合部は細い。ヨコナデ仕上げで内外ともにヘラミガキを施す。灰黄褐でクサリ礫含む。(22) も椀形であるが、筒部の径は大きく円板充填である。口径 14.8cm、残存高 4.7cmで、にぶい黄橙でクサリ礫含む。(23) も磨滅著しいが稜線を持つタイプである。ユビ成形ののちナデ整形で橙を呈する。(24) は口径 26.4cmと

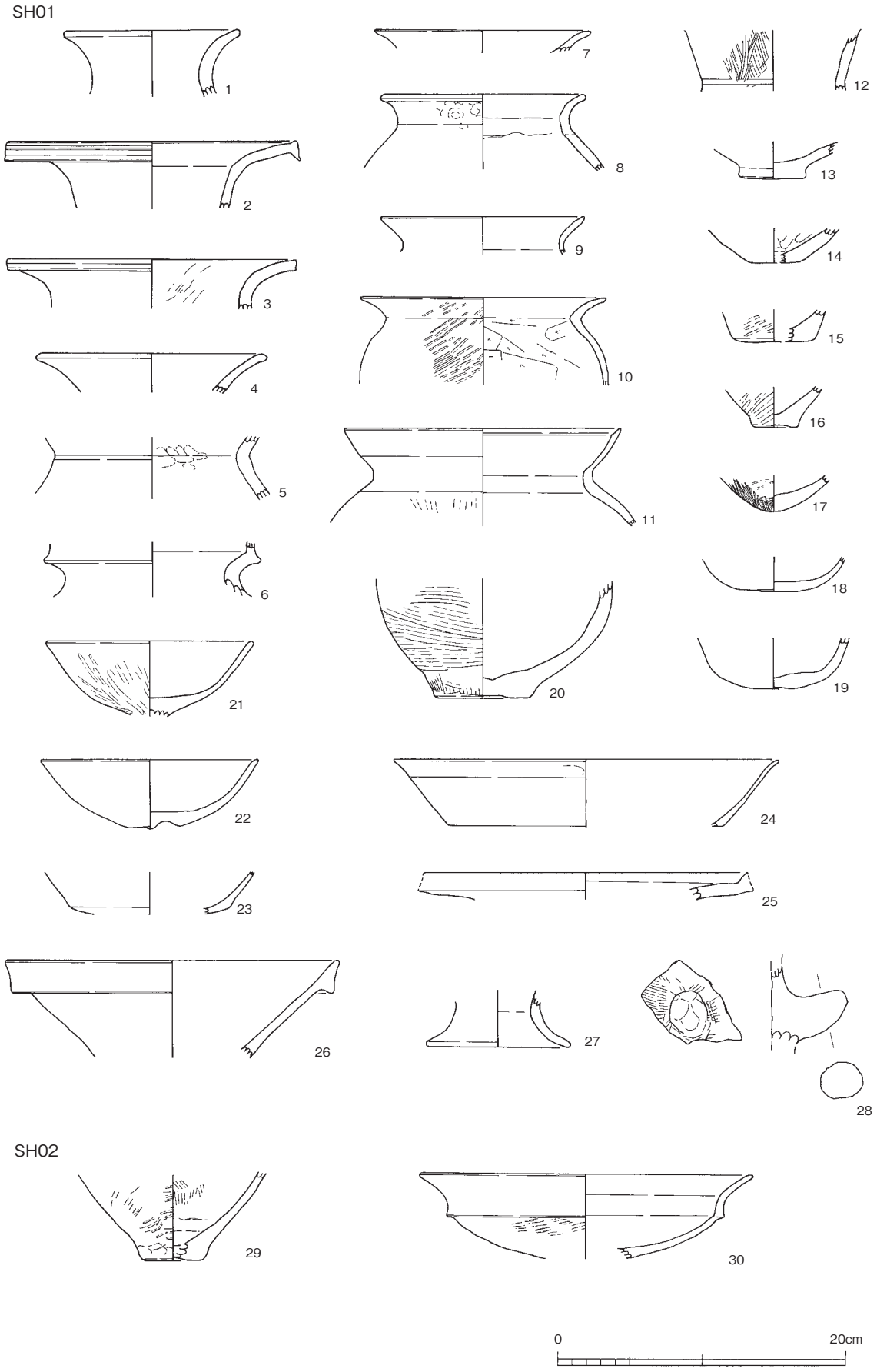


図 18　出土土器実測図 (1)

大形の段を持つ杯部で、薄く仕上げられている。端部は丸く外反している。橙で砂粒僅かに含むが緻密である。

（26）は器台上台部で僅かに内湾するが直線的に延びる。端部は面になり垂下ぎみである。両端ともに丸い。橙で端面に黒斑がある。口径 23.75cm、残存高 6.7cmを測る。（27）は脚台で大きく外反している。端部は角張りぎみである。底径 9.5cm、残存高 4.0cmを測り、浅黄橙でクサリ礫多く含む。外面ヘラミガキか。壺口縁部の可能性もある。（28）は把手である。中実で上向きに短く外反している。断面は最大径 2.9cmの楕円形でユビ成形の痕跡残す。体部外面はハケ整形で把手部との接合部を平滑にし、部分的にナデている。内面は板ナデで橙を呈する。先端は丸く、残存高 5.75cmを測る。

SH01 出土土器は一部古相を示すものもあるが、全体的に見ると庄内後半期と考えられる。が、その中で（11）だけは布留傾向が強く、布留期に入っているとするのが妥当であろうか。讃岐からの搬入土器もあり、細筋のタタキ甕も存在する。

SH02出土土器（29・30）

2 点図化している。（29）は甕底部で突出平底から内湾する体部になる。器壁は厚めである。底径 4.2cmで残存高 5.85cmを測る。右上がりから平行のタタキからナデ仕上げしている。底面もナデである。内面には粘土紐が見られハケ整形している。内面は灰黄褐で外面はにぶい黄橙を呈し、砂粒含んでいる。

（30）は有段高杯の杯部で 2 次焼成を受けている。内湾する下半から突出する稜線を持って外反する口縁部となる。外面は細い平行タタキをナデている。口縁部はヨコナデ仕上げで端部は尖りぎみである。砂粒やや多く含み、内面淡赤橙、外面にぶい橙を呈する。

2 点の土器が示す年代は SH01 より古く庄内前半期であるが、住居跡の形態が古墳時代後期である。

SH03出土土器（31 ～ 37）

7 点図化しているが時期幅が広い。（31）は弥生時代中期の壺口縁部の小片である。端面を儲け下方に大きく肥厚している。ヨコナデで仕上げ、円形浮文周辺はナデている。端面上部に竹管文を施した円形浮文を 2 個配している。小片であることから単位（2 個 1 対）か全体に等間隔に並べているかは不明である。上面にも加飾しており、扇形文が施されている。内面浅黄橙、外面灰白で砂粒含んでいる。

（32）は壺口縁部で端部を欠いている。頸部から外反し、口唇部は上方に端部をつまみ出している。内面浅黄橙、外面灰白で砂粒含んでいる。復原径 12.0cm、残存高 6.1cmで磨滅著しい。

（33）は弥生前期甕の口縁部で端部を欠いている。如意形を呈するタイプで直立ぎみの体部から外反する頸部下に 2 条の沈線を施す。頸部径 26.0cm、残存高 5.0cmを測る。外面にぶい黄橙、内面橙で砂粒含む。焼成甘く、全体にナデ整形である。

（34）は磨滅しているが精製鉢であろう。口径 11.8cm、残存高 3.5cmを測り、内外面ともににぶい橙を呈する。内湾し端部尖っている。ヨコナデ藍上げで、僅かに砂粒含むが胎土緻密である。

（35）はタタキ成形をした突出平底の底部で底径 5.6cm、残存高 3.1cmを測る。タタキののちユビ成形しナデ仕上げを行う。外面は淡黄、内面は灰黄で、砂粒含んでいる。不安定な平底で一応壺と想われるが、甕かもしれない。底面もナデ仕上げである。

（36）は平底から外反している。内外面ともにハケ整形からナデている。内面にはユビオサエが見られ、底面はナデ仕上げである。灰黄褐で砂粒含む。内面に有機質付着している。

（37）も底部でユビ成形によって底部を形成している。僅かに上げ底となっており、底径 4.0cm、残存

高 3.4cmを測る。ナデ整形しているが、余り丁寧ではない。内面灰白、外面浅黄橙、砂粒含む。製塩土器の可能性も考えられる。

弥生土器も含まれているが、前代のものである。精製鉢が存在することから、庄内後半期と想われる。

ピット出土土器（38・39）

（38）は弥生前期甕で遺構の年代とは合っていない。口径 30.0cm、残存高 4.1cmを測り、内外ともに浅黄橙である。頸部下に 3 条の沈線があり、1 本ずつ施文している。残存端にももう 1 条沈線があるかもしれない。内湾する体部から外反する口縁部で端部は角張っている。焼成甘く砂粒多く含んでいる。P01 出土。

（39）は P02 出土で甕底部である。突出平底で底部再成形である。底面は不安定で煤が付着している。外面はハケ整形で赤橙、内面はナデ仕上げで灰白で、砂粒含んでいる。2 次焼成を受けている。

SD01出土土器（40・41）

（40）は弥生土器であろう。頸部の破片で指頭圧痕を施した貼付突帯を回している。突帯より上の頸部にはヘラ描きの装飾を施しており、絵画かもしれない。外面にぶい橙、内面黄灰、砂粒僅かに含む。焼成甘く、残存高 2.6cm。

（41）は小形甕口縁部であろう。外反し端部内外に肥厚している。特に上方につまみ出している。口径 12.2cm、残存高 1.8cmを測り、外面褐灰、内面浅黄橙を呈する。ヨコナデで煤付着している。

SD02出土土器（42 ～ 72）

（42 ～ 49）の 8 点は須恵器である。（42）は口径 21.8cmの中型壺口縁部で稜線を持たない頸部から大きく外反し端部内外に肥厚している。僅かに砂粒含み、内面緑灰、外面灰を示す。口径 21.8cm、残存高 6.1cmでロクロナデである。（43）も口径 17.0cmの中型壺で短く外反する口縁部は玉縁状に折り曲げている。ロクロナデで、口径 17.0cm、残存高 2.65cmを測る。内面灰、外面緑灰を呈しており、胎土緻密である。（44）は口径 13.8cmのやや小型の口縁部で外反するが途中で屈曲している。端部は角張り、下に肥厚している。その下に 1 条の低い突帯がある。内外面ともに灰をしており、僅かに砂粒含む。ロクロナデで外面下半にはカキメが見られる。（45）は残存高 1.5cmを測る小型の口縁部で甕であろうか。外反し端部尖りぎみで薄い。端部下に 1 条の突帯があり、その下に細かい波状文が施されている。残存高 1.5cmで内面暗灰黄、外面灰である。胎土緻密で、ロクロナデである。（46）は裾径 9.7cmの高杯脚部で外反し端部内外に肥厚している。灰を呈し、ロクロナデで外面にはカキメが見られる。方形透孔あるが個数は不明である。四方か三方であろう。（47）は口径 29.6cmの大型甕口縁部で直線に広がり、端部面となり内側に肥厚している。ロクロナデで、外面には 2 帯以上の波状文が施される。上の帯は 7 本から成っている。灰白で砂粒僅かに含む。（48）も大型甕の頸部である。稜線を持たずに外反している。ロクロナデであるが、工具痕跡が残っている。（49）は残存高 6.65cmを測る焼成良好で他より良質である。器台下台部で緩やかに裾広がりとなる。方形透孔（個数不明）があり、その上に 3 条、下に 1 条の突帯が残存している。透孔のあるブロックには上下一杯に 9 条 1 単位の波状文が施されている。左右に詰まった文様で、逆時計回りに施文している。上端にも波状文の一部が見られ、3 条突帯の上に波状文帯がある。残存部下端には自然釉が溜まっている。内面青灰、外面灰白で砂粒僅かに含んでいる。

（50 ～ 53）の 4 点は古式土師器である。（50）は布留甕で内湾する体部から内湾する口縁部になり、尖りぎみの端面となる口唇部になる。端面中央は凹んでいない。器壁は厚めでヨコナデで仕上げる。内面には粘土紐の継ぎ目が残っている。浅黄橙で砂粒含む。口径 18.6cm、残存高 5.6cmである。（51）は甕

口縁部の小片で外傾し端部内外に肥厚する。内面浅黄橙で外面浅黄である。（52）は大型の底部で壺であろう。突出平底で低く外傾する体部になる。タタキ成形で外面は灰白、内面はハケ整形で灰を示す。残存高 3.3cmで砂粒含む。（53）は口径 14.8cm、残存高 6.0cmの高杯杯部である。筒部を包み込んでから平たく外傾し、稜線を持って僅かに外反する。端部は薄く尖っている。ヨコナデ仕上げで、内面浅黄、外面にぶい橙を呈する。

（54 ～ 57）は弥生中期の土器である。（54）は最大腹径 37.2cmを測る大型の台付き鉢体部である。高杯杯部の可能性もある。最大腹径上部に 3 条の凹線文を施す。外面ヨコナデ、内面ナデで、内外面とも灰白である。屈曲部内面には指頭圧痕が残る。（55 ～ 57）は底部である。（55）は僅かに上げ底となり、ユビ成形からナデ仕上げで砂粒含んでいる。内面浅黄橙、外面にぶい橙で、底径 4.7cm、残存高 3.3cmを測る。（56）は底径 9.4cmと大型で残存高 6.85cmである。平底から内湾する体部になる。ユビ成形からナデ仕上げで底面に植物の繊維が残る。内面にぶい黄橙で有機質付着している。外面橙で煤付着しており、砂粒含んでいる。（57）は底径 10.5cmと大きく平底から内湾する。ユビ成形からナデと思われ、内面灰白、外面浅黄橙をしている。

（58 ～ 72）は弥生前期の土器である。（58 ～ 68）は壺で（69 ～ 72）は甕である。（58）は口径 13.6cm、残存高 7.3cmを測り、内傾する肩部から外反する口縁部で端部は角張る。端面には 1 条の沈線が認められる。内面は浅黄橙でユビ成形からナデ調整。外面はにぶい黄橙でナデからミガキを施している。口縁部外面はハケ整形からナデ調整である。頸部外面は沈線状に凹んでいるが、成形時のものかもしれない。（59）は外反する口縁部で端面は角張り 1 条の沈線がある。内面は浅黄橙で、外面はにぶい黄橙で、口径 19.9cmを測る。（60）は内湾する壺体部で、外面に木葉文の一部と思われる 3 条の施文がある。浅黄橙を呈し、内面はユビ成形、外面はナデである。（61）は僅かに内湾する体部破片で外面に円形浮文があるように見えるが、胎土が粗いことから前期のものと考えた。浅黄を示す。（62）も木葉文の一部と思われるが明確でない。（63）は最大腹径 33.6cm、残存高 13.05cmの体部で、最大腹径の上部に 1 条の貼付突帯を有する。突帯には指頭圧痕を不定間隔で施文している。粘土紐の継ぎ目顕著で、内面はナデで灰白である。外面は浅黄橙でハケ整形からナデ仕上げ。（64 ～ 68）は平底から内湾する体部となる底部である。底部近くをユビ成形し他はナデ整形である。（65）だけ底面もナデ調整している。（69）は如意状の口縁部で口径 23.1cm、残存高 9.6cmを測る。頸部下に細い沈線 3 条で胎土に金雲母多く含み搬入品の可能性高い。（70）は短い口縁部で角張った端部に刻み目を有する。刻み目は 3 個単位かもしれない。頸部に 2 条の沈線があり、さらに下端にもありそうである。口径 27.8cmで内面にぶい橙、外面にぶい黄橙である。（71）は直立する体部から短い如意状の口縁部で、端部尖っており口径 27,8cmを測る。頸部に 1 条の沈線がある。（72）は平底から内湾する底部で底径 8.1cmを測る。ユビ成形からヘラ調整を加える。

SD03出土土器（73 ～ 75）

（73）は外傾する口縁部で端部尖り、断面台形の突帯を端部に近い位置に付加する。指頭圧痕で施文する鉢であろう。にぶい黄橙でナデ仕上げ。（74）は突帯文土器の口縁部で端部を欠く灰黄褐を呈し、焼成甘い。（75）は平底から外反する。底面も含めてナデ調整で、内面灰白、外面浅黄橙である。底径 7.0 cm、残存高 2.9cmを測る。

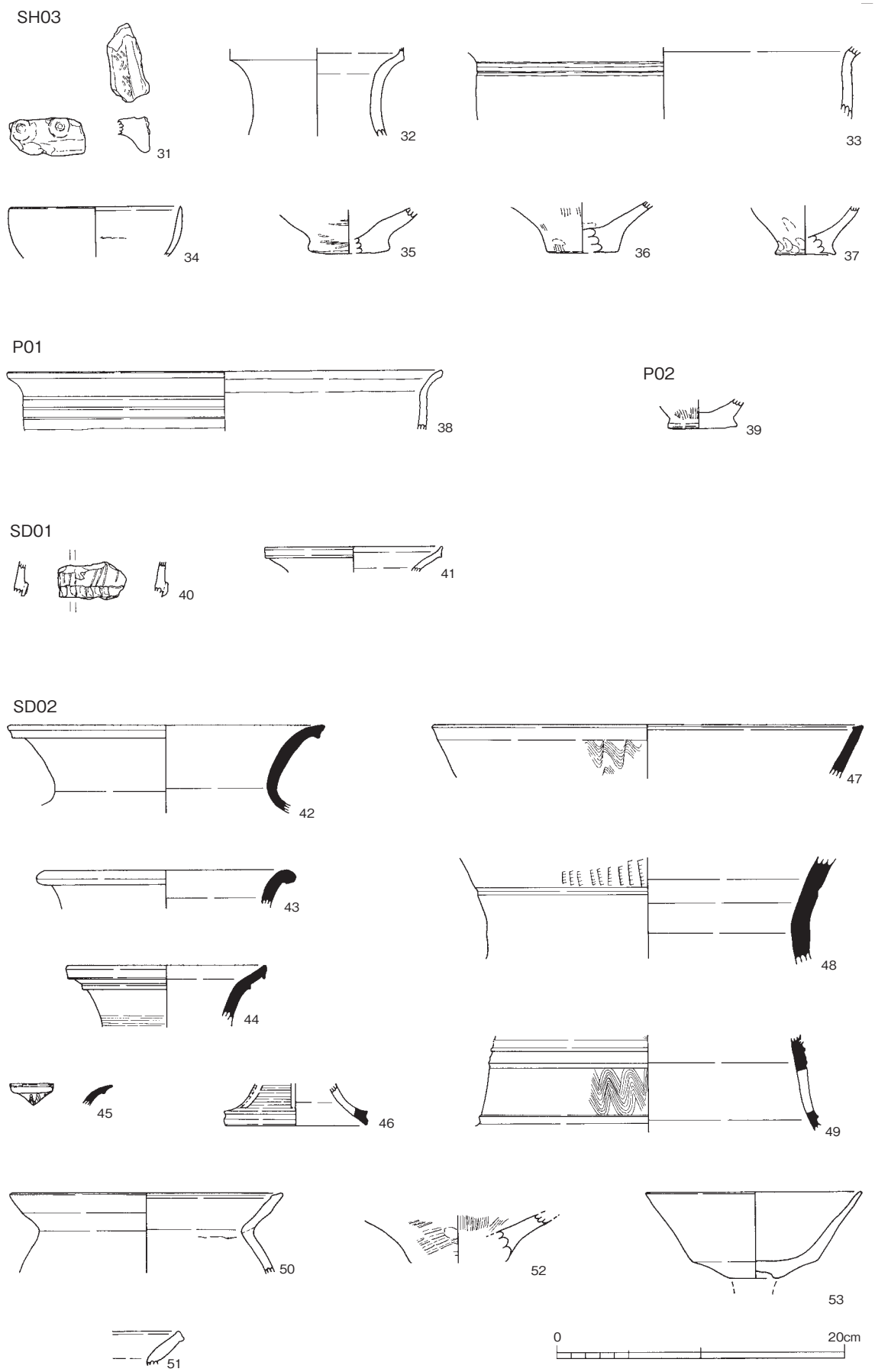


図 19　出土土器実測図 (2)

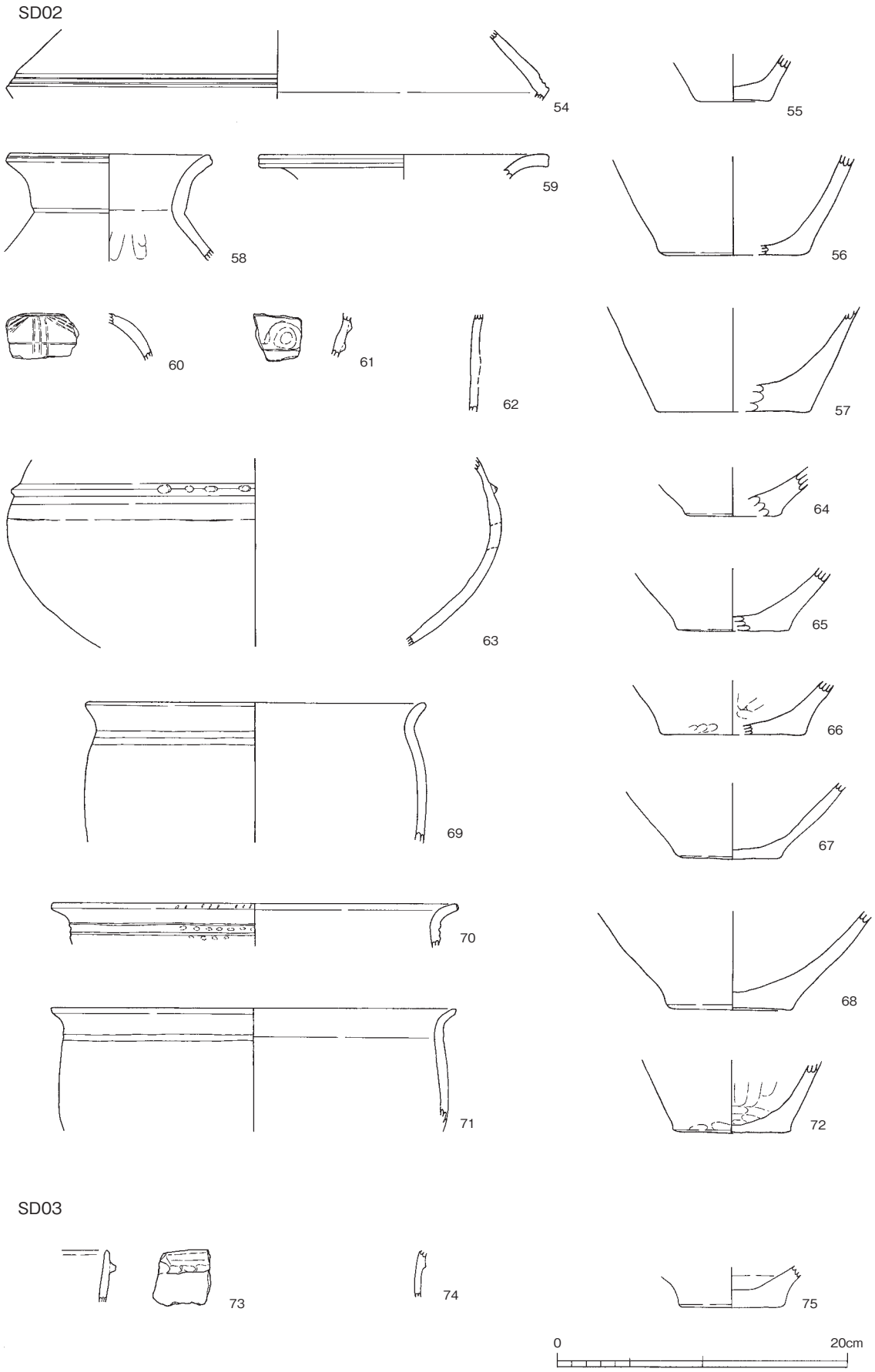


図 20　出土土器実測図 (3)

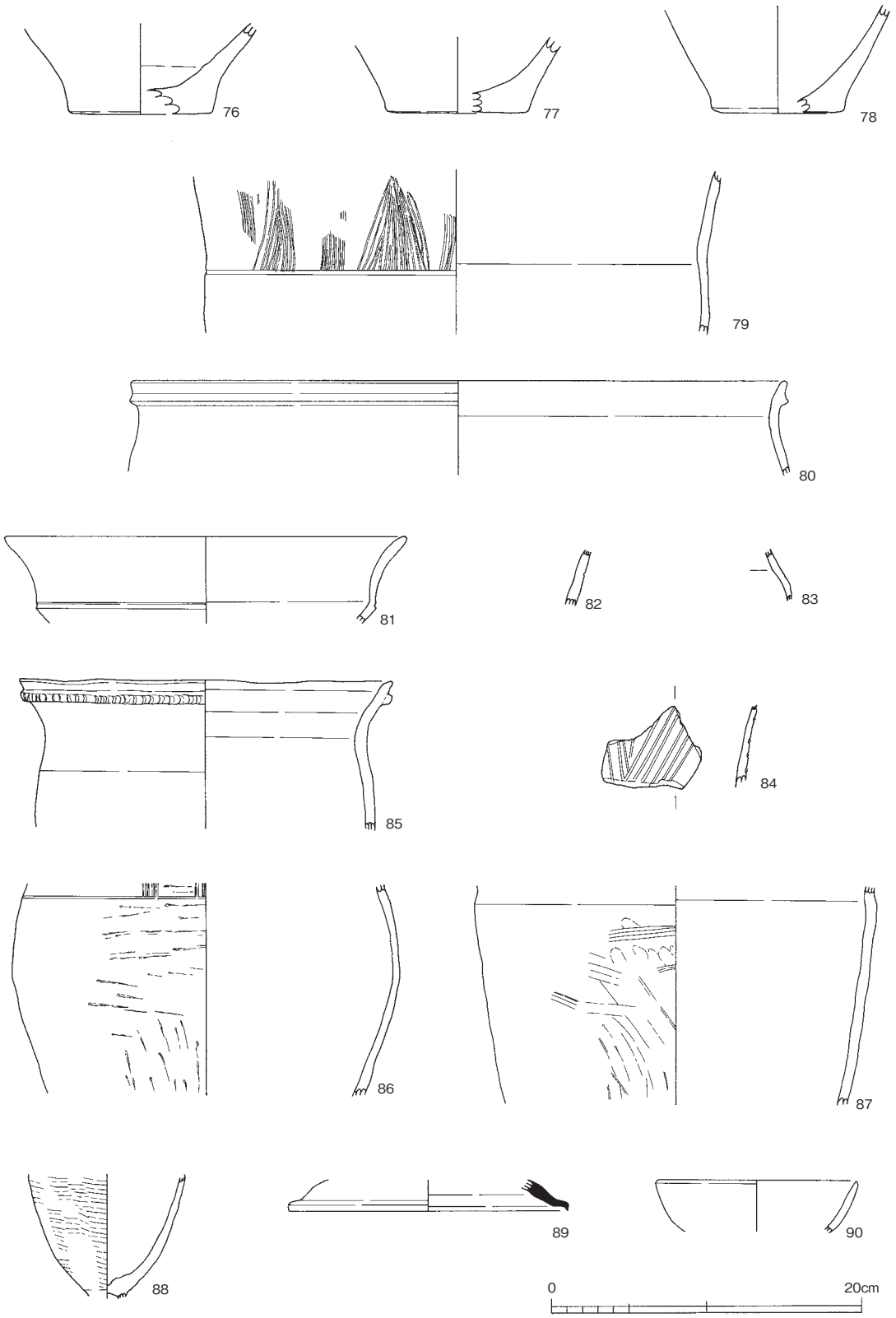


図 21　出土土器実測図 (4)

包含層出土土器（76 ～ 90）

（76 ～ 78）は古式土師器底部である。（76）は平底から外傾する体部になり、底径 8.8cmを測る。ユビ成形からナデで化粧土を塗布している。内面黄橙、外面浅黄橙で、断面は灰のサンドイッチ状になっている。（77）は底径 9.0cm、残存高 4.9cmの平底で、ナデ仕上げで浅黄橙を呈する。（78）は底径 8.2cm、残存高 6.95cmの平底から内湾する体部となる。2 次焼成を受け、底面も丁寧にナデ仕上げしている。内面黄灰、外面橙で、砂粒多く含んでいる。

（79 ～ 87）は縄文晩期土器である。（79）は広口深鉢で僅かな頸部で緩やかに延びる。頸部に沈線を持ち、上部に三角状の装飾を施す。内面浅黄橙、外面にぶい橙で、残存高 10.65cm、頸部径 31.0cmを測る。（80）は口径 42.0cmと大型に復原された深鉢である。頸部をほとんど有しない突帯文土器で外反し、端部は角張りぎみに尖る。端部下に断面三角の突帯を加える。灰でナデを施す。（81）は外傾から稜線を持って外反する口縁部である。器壁は厚めで端部は丸い。ナデ仕上げで、屈曲部に 1 条の沈線を有する。深鉢口縁部で、にぶい黄橙～にぶい黄を呈する。（82）～（84）は文様を有する深鉢体部である。（85）は内湾する体部から短く外傾する口縁部になり、端部外側に尖らして角張る。端部下に台形の突帯を巡らせ逆 C 字状に押圧で施文している。内面黄灰、外面にぶい黄橙で砂粒含む。口径 24.0cmで、口縁部は水平でなく歪である。残存高 7.55cm。（86）（87）は条痕文土器である。（86）は内外面ともに条痕を持つ。内湾し、焼成やや悪い。内面黒で外面灰を示し、砂粒含む。最大腹径 24.8cmで肩部に 1 条の沈線を有する。（87）は内湾ぎみに外傾し内面浅黄橙、外面にぶい黄橙で残存高 14.1cmである。

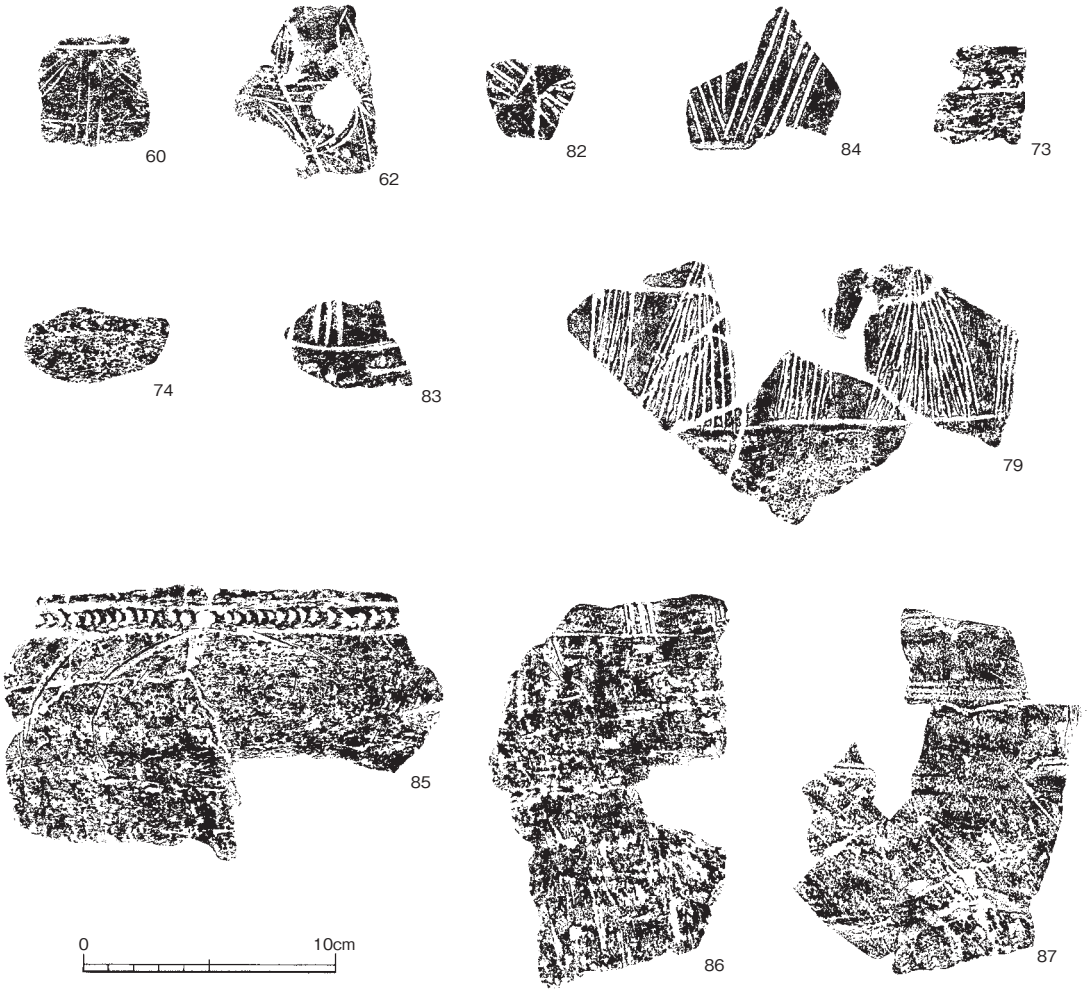


図 22　出土土器拓本

(88) は製塩土器である。脚台Ⅳ式で小さな脚台が付くタイプであるが欠失している。内湾する体部で、外面は平行タタキを施し、内面はユビ成形からナデである。内外面ともに灰白で砂粒含む。口縁端部を欠くが、端部に近いものと思われる。脚台部との接合は指頭圧痕が残り、黒っぽい色調をしている。(89) は奈良時代の須恵器杯蓋口縁部である。内湾し屈曲して端部は面となり下方につまみ出す。ロクロナデで内面は灰白、外面は黄灰をしている。(90) は土師器鉢である。磨滅著しく、粘土紐の継ぎ目残る。内湾し、外面浅黄橙、内面黄橙である。胎土が精良であることから、奈良時代の椀かもしれない。

鉄器

鉄器は７点出土している。断面四角で茎状となるもの５点と板状のもの２点である。M1 は面精査、M2・3 が SD01、M4 が SD02、M5・6 が断ち割り時に出土したもので SX01 の可能性が高い。M7 は SK06 出土で、近世の粘土採掘坑である。

M1 ～５は断面四角で串状になるもので鉄族の茎か鉄釘かと思われるが明確でない。 M4 だけ断面形状の角が取れているが､それ以外は角がシャープである。すべて小片で M2 が残存長最大で 2.5cmを測る。M1 は下部が端部であるが、M2 ～４は上下とも続いている。M5 は明確ではないが、両端とも尖らせており上下とも生きている可能性が高い。針にはならないが、針状を呈している。M5 は平面形は鏃形をしているが、刃部を研ぎ出しておらず鉄鏃ではない。M7 も鍛造で板状であるが、器種不明で近世以降のものである。

M8 はフイゴの羽口である。外面にガラス滓が溶着している。内面は強く被熱しており､赤変している。先端部で小形のものである。

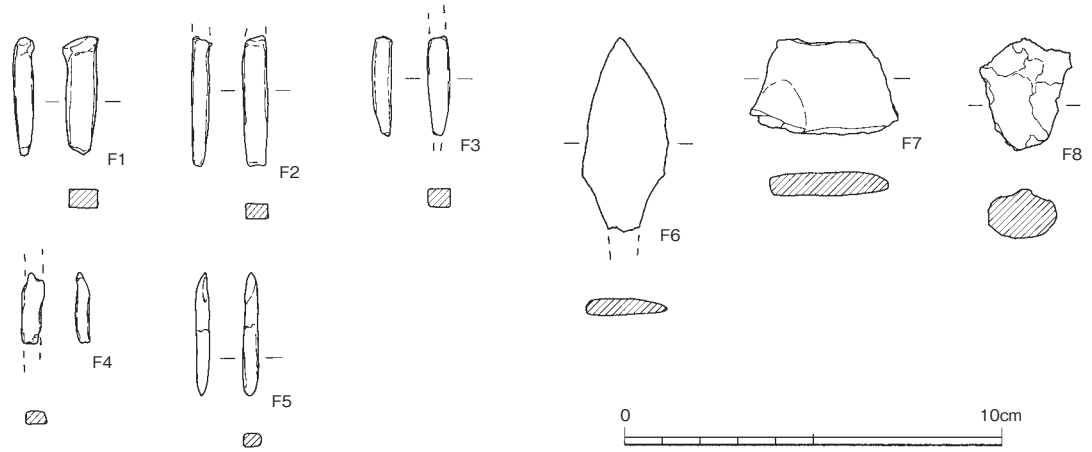


図 23　出土鉄器実測図

石器

６点を図化した。全てサヌカイト製である。

Ｓ１は凹基式の石鏃で、先端に至るまでほぼ均一の厚みを持つ。先端はやや欠損するが、使用によるものと考えられる。作用部の作りは雑である。

Ｓ２～Ｓ６は楔形石器である。Ｓ２は、上辺にのみ階段状剥離が見られる。向かい合う辺は三角形をなし、大きな剥離面のままである。Ｓ３は５点の中で最も薄く、上辺と左縁辺下部に階段状剥離が見られる。Ｓ４は上辺にのみ階段状剥離が見られ、特に裏面の剥離は顕著である。右辺は自然面を残し、左

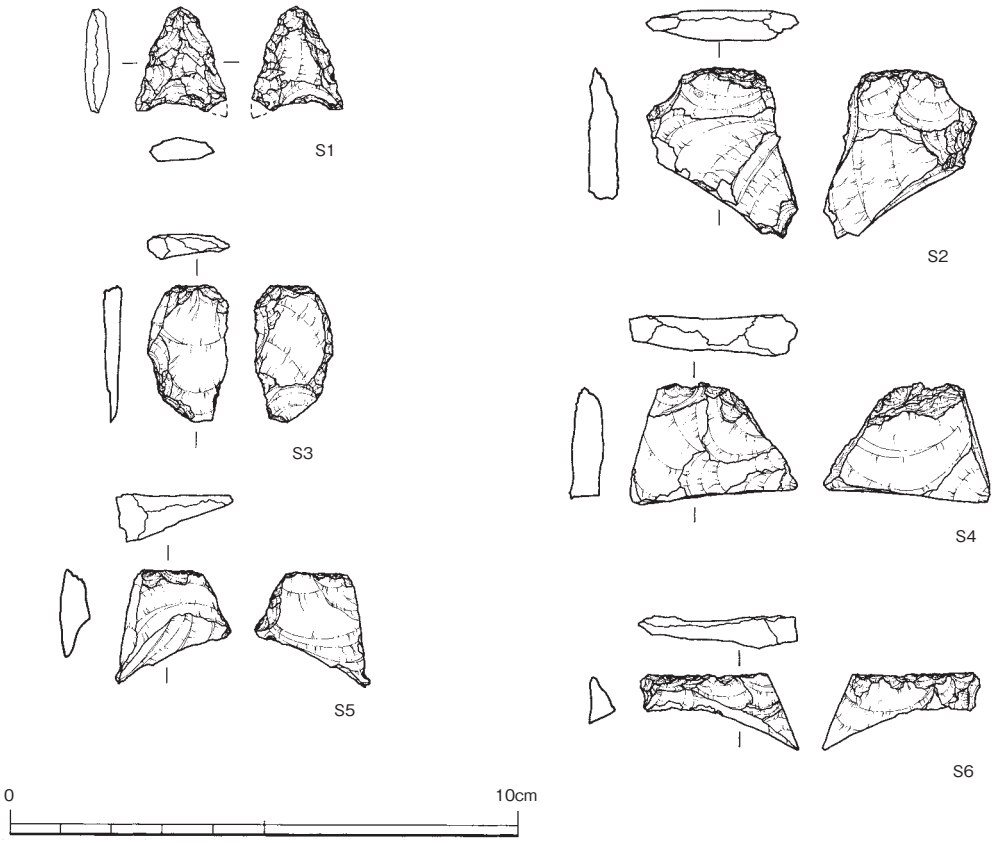


図 24　出土石器実測図

・下辺は剪断面である。下辺は使用により折れたものと思われる。Ｓ５は上辺と右縁辺が使用面で、左辺は剪断面である。剪断面の厚みから推測すると、元はある程度の大きさがあったものの、使用するうちにこのような小さな形になったと思われる。Ｓ６は右辺と下辺が剪断面である。上辺の階段状剥離は、連続した剥離面を持つ。

表２　石器計測表

報告番号	器種	石材	地区	遺構	土層	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)
Ｓ１	石鏃	サヌカイト		SD02	西側埋土	20.5	18.0	5.2	1.5
Ｓ２	楔形石器	サヌカイト		SD02	西側埋土	33.7	30.3	6.5	5.5
Ｓ３	楔形石器	サヌカイト	断ち割り		灰シルト	27.0	16.0	5.0	1.9
Ｓ４	楔形石器	サヌカイト		SD03		24.0	33.3	8.2	6.6
Ｓ５	楔形石器	サヌカイト		SD02	上層（主にレキ層）	22.6	22.6	10.0	2.6
Ｓ６	楔形石器	サヌカイト		SD02	西側埋土	15.0	31.0	6.5	1.5

V　沖代遺跡出土土器の胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査では、沖代遺跡から出土した、古墳時代初頭、弥生時代前期および縄文時代晩期の各時期に比定された土器について、その材質（胎土）の特性を明らかにし、その生産や供給事情に関わる資料を作成する。特に、今回の試料では時期と胎土との対応関係から、それぞれの時期における事情の違いあるいは共通性について考察する。

1．試料

試料は、沖代遺跡から出土した土器片4点である。内訳は、古墳時代初頭の高杯（No.1）、古墳時代初頭の製塩土器（No.2）、縄文時代晩期の鉢（No.3）、弥生時代前期の壺（No.4）とされている。発掘調査所見によれば、No.2の製塩土器が播磨産と考えられているほかは、いずれも地元産と考えられている。試料の一覧を表1に示す。

表３　胎土分析試料一覧および胎土分類

No.	時　期	器　種	備　考	胎土分類							
				鉱物・岩石組成				粒径組成			
				A2 (A4)	A4	C8	M	m	f	vf	cs
1	古墳時代初頭	高杯	地元産と思われる				■	●		■	●
2	古墳時代初頭	製塩土器	播磨産	■						●	■
3	縄文時代晩期	鉢	地元産と思われる		■					●	■
4	弥生時代前期	壺	地元産と思われる			■				■	●

鉱物・岩石組成の各分類内容は本文を参照されたい。

砂全体の粒径組成においてピークを構成する粒径：c; 粗粒砂　m; 中粒砂　f; 細粒砂　vf; 極細粒砂　cs; 粗粒シルト　●; 第二のピーク

2．分析方法

当社では、これまでに兵庫県内各地の遺跡より出土した土器の胎土分析には、松田ほか（1999）の方法を用いてきた。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、各粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いも見出すことができるために、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。したがって、単に岩片や鉱物片の種類のみを捉えただけでは試料間の胎土の区別ができないことが予想される、同一の地質分布範囲内で作られた土器の胎土分析には、松田ほか（1999）の方法は適当である。以下に試料の処理過程を述べる。

薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。観

察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

3．結果

薄片観察結果を表４、図25～27に示す。砂粒の種類構成をみると、鉱物片では4点ともに石英が多く、次いで斜長石が多く、微量のカリ長石を伴うという組成が共通する。さらにNo.1では極めて微量の角閃石と不透明鉱物、No.3では極めて微量の緑廉石、No.4では極めて微量の角閃石と緑廉石がそれぞれ含まれている。岩石片では、4点はそれぞれ異なる組成を示す。No.1は、流紋岩・デイサイトが多く、他には微量の多結晶石英、変質岩、珪化岩、火山ガラスを伴う組成、No.2は、火山ガラスが多く、他に微量の砂岩、凝灰岩、流紋岩・デイサイト、多結晶石英、花崗岩類を伴う組成、No.3は、特に多い種類の岩石片はなく、いずれも微量の頁岩、砂岩、凝灰岩、流紋岩・デイサイト、花崗岩類、変質岩、珪化岩を伴う組成、No.4は花崗岩類と火山ガラスが多く、他に微量の流紋岩・デイサイトと多結晶石英を伴う組成である。

これまでの兵庫県下の遺跡出土土器胎土分析において設定した鉱物片および岩石片の種類構成による胎土分類では、A類からM類までの種類が設定され、さらに、各種類について副次的な鉱物や岩石の種類により細分もしている。上述した4点の鉱物・岩石組成をその基準に従って分類してみると、No.1は流紋岩・デイサイトが突出して多いことを特徴とするM類に分類される。No.2は堆積岩類、凝灰岩または流紋岩・デイサイト、花崗岩類の三者を含み、それらに加えて火山ガラスを比較的多く含むことを特徴とするA2類に分類され、No.3も同様の三者を含むが、変質岩と珪化岩および火山ガラスを伴うことでA4類に分類される。No.4は、花崗岩類を多く含むC類に分類されるが、これまでに分類されたC1～C7類の中に、少量の火山ガラスを伴うという組成は認められなかったことから、ここで新たにC8類とする。

次に各試料の砂分全体の粒径組成をみると、No.1とNo.4は極細粒砂をモードとし、No.2とNo.3は粗粒シルトをモードとする。また、モードに次いで多い粒径は、No.1では中粒砂と粗粒シルトであり、No.2とNo.3は極細粒砂、No.4は粗粒シルトである。

砕屑物・基質・孔隙の割合では、No.2が砕屑物の割合が最も少なくて約10%、No.3が最も多く約20%、No.1とNo.4はそれらの中間の約15%を示す。

なお、上述した各試料の鉱物・岩石組成、粒径組成における各分類結果は、一覧にして表３に併記する。

表４　薄片観察結果

No.	砂粒区分		砂粒の種類構成																	合計
			鉱物片						岩石片								その他			
			石英	カリ長石	斜長石	角閃石	緑簾石	不透明鉱物	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	多結晶石英	花崗岩類	変質岩	珪化岩	火山ガラス	粘土塊	植物珪酸体	
1	砂	細礫	2																	2
		極粗粒砂	6									1				1				8
		粗粒砂	13									6			1	2				22
		中粒砂	11	2	2							7				1				23
		細粒砂	6	1	9							5					1			22
		極細粒砂	10	2	14	1							1							28
		粗粒シルト	9	1	10			1											2	23
		中粒シルト	4		1															5
	基質																			791
	孔隙																			22
2	砂	細礫																		0
		極粗粒砂								1	1	1						1		4
		粗粒砂										1						1		2
		中粒砂	1									1		1			1			4
		細粒砂															8			8
		極細粒砂			1								2				5			8
		粗粒シルト	7		3								1				2			13
		中粒シルト	1																	1
	基質																			313
	孔隙																			29
3	砂	細礫																		0
		極粗粒砂	2						1			2		1		3				9
		粗粒砂	2						1	1	1	2			1	1				9
		中粒砂	1											1		1	1			4
		細粒砂	1		1							1								3
		極細粒砂	16	3	5															24
		粗粒シルト	13	3	13		1													30
		中粒シルト	7																	7
	基質																			330
	孔隙																			19
4	砂	細礫												1						1
		極粗粒砂	2		1									8						11
		粗粒砂		1	2									1						4
		中粒砂	2	1	2							1	1				3			10
		細粒砂	5	1	3							1					6			16
		極細粒砂	13	1	7	1											6			28
		粗粒シルト	9	2	6		1										1			19
		中粒シルト	4		1															5
	基質																			564
	孔隙																			10

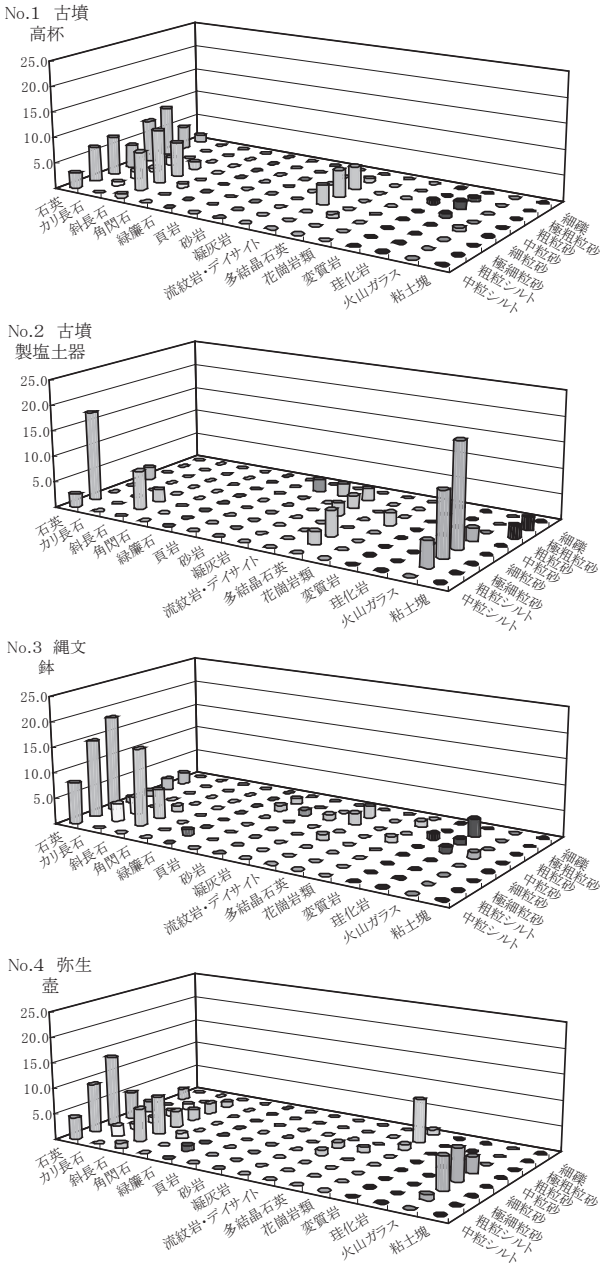


図25　各粒度階における鉱物･岩石出現頻度

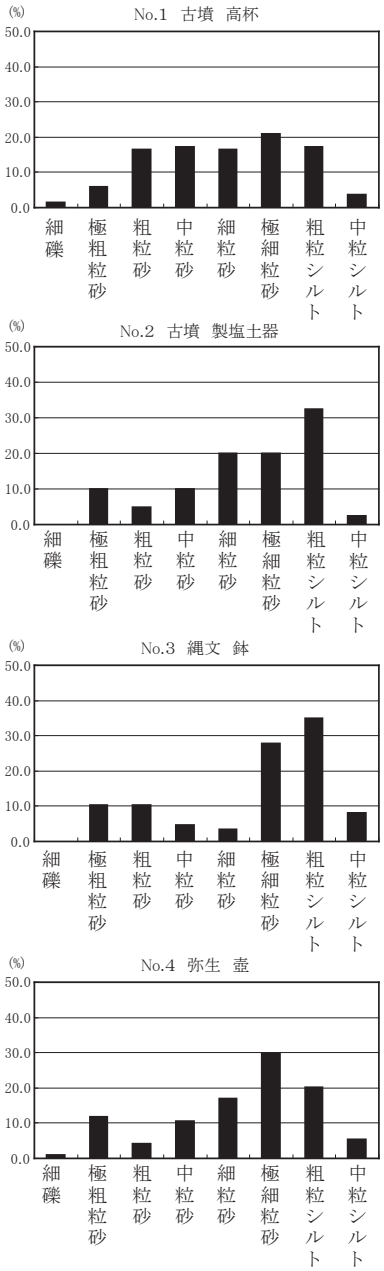


図26　胎土中の砂の粒径組成

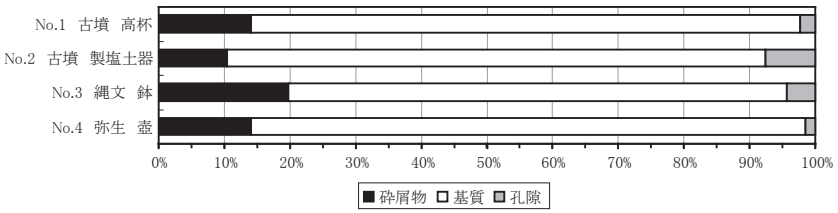


図27　砕屑物･基質･孔隙の割合

４．考察

(1) 胎土の由来

当社では、これまでにも沖代遺跡から至近の距離に位置する丁・柳ヶ瀬遺跡および東南遺跡において出土した土器の胎土分析を行っている（矢作・石岡,2009a;2009b）。丁・柳ヶ瀬遺跡は、東北東方向へ約2.5kmほど離れた大津茂川の河谷内に位置し、東南遺跡は、沖代遺跡の北北東方向へ約2.5kmほど離れた沖積低地に位置している。沖代遺跡の地質学的背景を考えた場合、揖保川左岸の沖積低地という共通した地形的位置にある東南遺跡の地質学的背景とほぼ同様であると考えることができる。東南遺跡出土土器の胎土分析では、縄文時代後期の土器と古墳時代初頭の土師器を主体とする試料であったが、これらの多くはA4類に分類されるという結果であった。東南遺跡の報告では、A4類の鉱物・岩石組成は、山元ほか（2000）の記載による揖保川流域の地質と整合することから、A4類の胎土は揖保川下流域という地域性を示唆するものであると考えた。今回の分析では、縄文時代晩期の鉢とされたNo.3の試料が、A4類に分類され、東南遺跡の分析結果とも調和する結果が得られたと言える。すなわち、No.3の縄文土器は、沖代遺跡およびその周辺の揖保川下流域に分布する砂や粘土が使用されている可能性が高いと考えられる。このことは、地元産とした発掘調査所見とも一致する。

No.3とほぼ同様の鉱物片・岩石片の産状を示すNo.2の古墳時代の製塩土器は、分類ではA2類としたが、これはA4類の分類基準の一つとした変質岩や珪化岩が認められなかったことによるものである。ただし、No.2の試料では、砂粒が全体的に微量しか捉えられなかったことを考慮すると、試料の条件（薄片にした断面の面積等）が良ければ、変質岩や珪化岩も認められた可能性はあるといえる。その場合、No.2もA4類に分類されることになり、No.3と同様に沖代遺跡も含めた揖保川下流域に材料採取地を推定することができる。一方、丁・柳ヶ瀬遺跡の胎土分析では、弥生土器の一部にA2類に分類された試料が認められているが、いずれも花崗岩類の岩石片に桜山岩体の花崗閃緑岩（山元ほか,2000）と同様の微文象組織が鏡下で認められていることから、これら試料のA2類は、大津茂川流域を示唆する胎土であるとした。今回のNo.2では、花崗岩類の岩石片に微文象組織を確認することができなかったため、丁・柳ヶ瀬遺跡のA2類と同様の由来であるかは現時点では特定できない。No.2の材料採取地を揖保川下流域とするか大津茂川流域とするかは、今後の類例の分析結果を得た上で検討する必要がある。

No.4の弥生土器が分類されたC類は、丁･柳ヶ瀬遺跡出土の弥生土器の多くが分類された胎土である。また、丁・柳ヶ瀬遺跡出土弥生土器のC類の花崗岩類の岩石片には、桜山岩体の花崗閃緑岩の特徴である微文象組織が認められたことから、C類の地域性として、桜山岩体からなる丘陵周縁部を推定した。今回のNo.4の胎土についても、花崗岩類の岩石片には微文象組織が認められたことから、同様に桜山岩体の丘陵周縁部に由来すると考えられる。ただし、丁・柳ヶ瀬遺跡出土の弥生土器では、少量のチャートを伴うC4類と少量の凝灰岩を伴うC5類が多く、花崗岩類のみというC6類が少数混在し、今回のNo.4にみられたような少量の火山ガラスを伴うC8類という組成は認められていない。上述したA4類もA2類も、比較的新鮮なバブル型火山ガラスを含むことが特徴の一つであり、C8類の火山ガラスも同様に比較的新鮮なバブル型火山ガラスであった。東南遺跡や丁･柳ヶ瀬遺跡の胎土分析報告でも述べたように、A4類やA2類の火山ガラスの由来については、播磨平野西部に分布する丘陵の周縁部に形成された山麓緩斜面堆積物中に狭在する第四紀更新世のテフラ層であると考えられ、C8類の火山ガラスも同様に考えることができる。したがって、C8類の由来する地域としては、桜山岩体周縁に形成された山麓緩斜面堆積物の分布域周辺に推定される。C4 ～ C6類およびC8類の各胎土は、それぞれ、より局所的な土

器の産地の違いを示している可能性がある。これらの詳細な胎土の地域性の推定には、今後の周辺域における分析事例の蓄積が必要である。

No.1の古墳時代の高杯の胎土が分類されたM類については、特定の種類の岩石片が突出して多く含まれるという状況から、様々な種類の岩石片が適度に混在する沖積低地の堆積物に由来するというよりは、特定の岩石片の種類からなる岩体がすぐ背後にある場所の堆積物に由来すると考えることができる。M類の流紋岩は結晶質であることと珪化岩を伴うことも考慮すると、太子町や揖保川町、龍野市に分布する白亜紀-古第三紀の流紋岩からなる丘陵縁辺がM類の由来する地域として考えられる。現時点では、具体的にどの丘陵という特定はできないが、これも上述のC類各類の地域性と同様に分析事例の蓄積を必要とする。なお、M類の胎土は、これまでの分析事例では、姫路市東部に位置する豆腐町遺跡より出土した奈良時代後半とされる製塩土器に認められているのみである。

(2) 胎土と時期・器種との対応関係

1）古墳時代初頭　高杯（No.1）・製塩土器（No.2）

前述したように沖代遺跡から至近に位置する東南遺跡から出土した古墳時代初頭の甕や壺では、7点中4点の試料がA4類に分類された。また、粒径組成では、7点中6点の試料が、粗粒砂または中粒砂にモードを示した。今回の沖代遺跡の試料では、高杯と製塩土器がそれぞれ1点ずつであるが、それらのうち高杯の胎土は、東南遺跡の試料では認められなかったM類であった。沖代遺跡における甕や壺の胎土の様相は不明であるが、高杯のM類の胎土自体が、これまでの播磨平野西部における胎土分析事例の中では出現例が少ないことから、今回の沖代遺跡出土の高杯は、同時期の他の器種とは、その製作事情が異なっていた可能性があると考えられる。

一方、製塩土器の胎土は、A2類ながらもA4類にも分類される可能性のあることを示した。すなわち東南遺跡の甕や壺と同様の胎土分類となる可能性のあることが示された。発掘調査所見では、地元産とは区別して播磨産という指摘がなされているが、むしろ高杯よりも製塩土器の方が、地元産（揖保川下流域という範囲）である可能性は高いといえる。これまでは、古墳時代初頭の製塩土器という分析事例はなく、前述した豆腐町遺跡における奈良時代後半の製塩土器の事例があるのみである。この事例では、製塩土器の胎土は、C類または凝灰岩を多く含むことを特徴とするF類のいずれかに分類された。この事例との比較においては、今回の製塩土器の胎土分類結果は、奈良時代後半と古墳時代初頭との間における製塩土器の製作事情の違いを示している可能性があると言える。ただし、古墳時代初頭の製塩土器の分析事例の蓄積と検討も必要であろう。

2）縄文時代晩期　鉢（No.3）

東南遺跡における分析事例では、縄文時代後期とされた深鉢と浅鉢および鉢という試料合計16点が対象とされた。胎土分類は、16点中10点がA4類という結果であった。今回の沖代遺跡出土の縄文時代晩期の鉢は1点のみであるが、それがA4類であったことから、晩期の鉢も後期の土器と同様に遺跡周辺域の堆積物を材料とするものが多かったことが推定される。ただし、東南遺跡出土縄文土器試料の多くは、胎土中の砂の粒径組成において粗粒砂をモードとしており、粗粒シルトをモードとする今回の試料とは、その材質に違いのあることが認められる。今後の分析事例の展開において、揖保川下流域における晩期の土器の多くが、今回の試料と同様の粒径組成を示すと言うような結果が得られた場合には、後期と晩期の間で、例えば含有される砂粒の細粒化という変化が指摘できる。

3）弥生時代前期　壺（No.4）

前述したように丁・柳ヶ瀬遺跡出土弥生時代前期の壺および甕の多くはC類の胎土を有する結果が得られている。また、東南遺跡においても、弥生時代中期とされた試料3点のうち2点はC類に分類された。これらの結果から、揖保川下流域および大津茂川下流域においては、弥生時代前期から中期にかけての時期の土器材料として、桜山岩体の分布する丘陵周縁部の堆積物が使われていた可能性が高いと考えられる。今回の沖代遺跡出土の弥生時代前期の壺の分析結果は、1点ではあるが、この傾向を追認するものであると言える。東南遺跡や沖代遺跡のように、桜山岩体の丘陵からは離れた遺跡でもC類の胎土が多いという傾向が明瞭になれば、この地域の弥生土器については、縄文土器とは異なる製作事情があったことになる。これも今後の分析事例の展開に期待される。

引用文献

松田順一郎・三輪若葉・別所秀高,1999,瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察－岩石学的・堆積学的による－.日本文化財科学会第16回大会発表要旨集,120-121.

矢作健二・石岡智武,2009a,丁・柳ヶ瀬遺跡出土土器の胎土分析.兵庫県文化財調査報告　第350冊　姫路市　丁・柳ヶ瀬遺跡Ⅱ　都市計画街路網干線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書.兵庫県教育委員会,16-29.

矢作健二・石岡智武,2009b,東南遺跡出土土器の胎土分析.兵庫県文化財調査報告　第362冊　揖保郡太子町　東南遺跡　（主）太子御津線「街路龍野線」都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ.兵庫県教育委員会,50-66.

山元孝広・栗本史雄・吉岡敏和,2000,龍野地域の地質.地域地質研究報告（5万分の1図幅）,地質調査所,
66p.

Ⅵ　おわりに

176㎡と小面積で１週間余りと短期間の調査ではあったが、多くの成果を上げることが出来た。太子町域は遺跡の稠密地帯で沖代遺跡もすでに知られていた遺跡であった。従前の調査では弥生時代中期の遺物が出土していたが、今回の調査では縄文時代晩期から近世にかけての複合遺跡であることが明らかになった。

近世から最近新たに家屋が築かれるまでは耕作地になっており、南北方向の鋤溝が見られた。通常の鋤溝以外に半月状の痕跡も見られた。耕作痕以外に粘土採掘坑も検出された。太子町内の東南遺跡や鵤石田遺跡でも確認されており、良質な粘土を取得可能だったようで、瓦業者も多く存在したようである。

中世から古代にかけては明確ではない。僅かな遺物が出ていることと、掘立柱建物跡が１棟検出されているだけである。中世の可能性が高く小集落が営まれていたのであろうか。

古墳時代後期には人工の溝が完全に埋められるが、それは集落域を放棄した結果かもしれない。溝SD02は２段に掘り下げられ、下半は古墳時代前期に埋っている。ただ、後期にはまだ集落が継続しており、SH02は竈を有することから後期の所産と考えられる。出土遺物は古墳時代初頭のものに限られるが形態から後期と考えられる。

今回の調査結果からは弥生時代末から古墳時代初頭にかけてが集落の中心時期と考えられる。２棟の竪穴住居跡を調査したが、隣接する北側で太子町教育委員会が平成22年度本調査を実施し１棟以上の竪穴住居跡を検出している。比較的規模の大きな住居跡で銅鏃を保有していた。今回の調査でも庄内甕を持っている。播磨の中で庄内甕が出土する中心地の１つで、東側1.5㎞に大集落の和久遺跡があり、北側2.5 ～ 3㎞に拠点集落の鵤遺跡、北西1㎞に庄内期の開発集落とも言われる上構遺跡が立地している。このような庄内期の遺跡が集中する一画の集落であることが、大きな特徴である。

縄文晩期の土器は保存状態も良好であった。近隣ではこの時期の遺跡が多く、弥生時代の萌芽を考えさす地域である。包含層だけであるが、近い地点に集落跡があると期待される。

図 28　太子町教育委員会調査状況

写真図版

沖代遺跡周辺空中写真（国土地理院撮影）

写真図版 2

第 1 面全景（東から）

第 1 面全景（西から）

耕作痕・粘土採掘坑検出状況

機械掘削風景

SD01（南から）

SD01 アゼ（南から）

SD01（北から）

SD02（北から）

SD02 東肩部土器出土状態

SD02（南から）

調査風景

SD02 南壁

SD02 調査風景

SD03（南から）

写真図版 6

SK01（南から）

SK02（南から）

SK01 アゼ（南から）

SK02 アゼ（南から）

SK03（南から）

SK05（南から）

SK03 須恵器出土状態（南から）

P24 断ち割り（南から）

SH01（北から）

SH01 アゼ（北から）

SH01 床面土器出土状態

SH01 アゼ（南から）

写真図版 8

SH02（南から）

SH02 アゼ（南から）

SH02 東辺土器出土状態（西から）

SH02 調査風景

SH02 炉跡断ち割り（南から）

SH03・SX01（東から）

SH03・SX01（北東から）

SH03 炉跡断ち割り（北から）

第２面全景（東から）

東壁

南壁断ち割り

包含層製塩土器出土状態

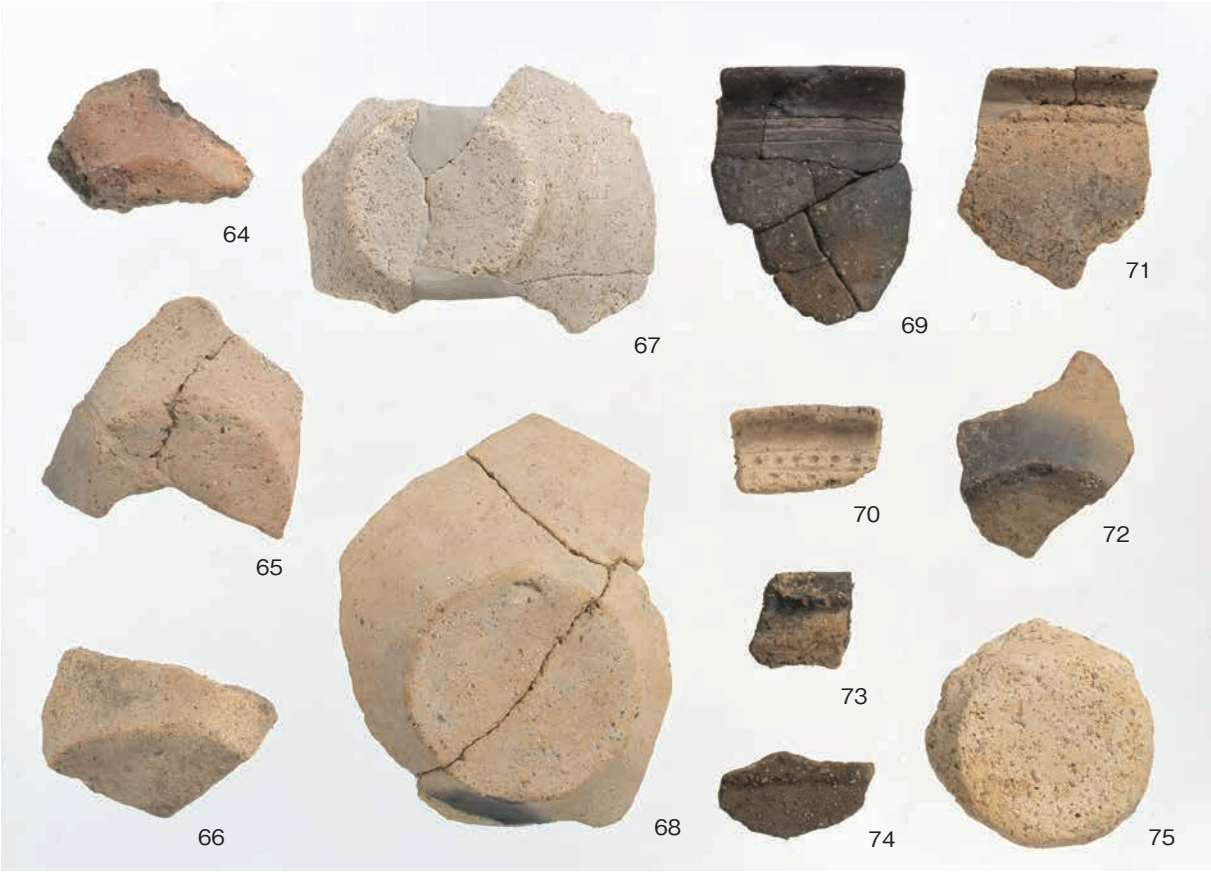
地元説明会

調査風景

出土遺物（1）

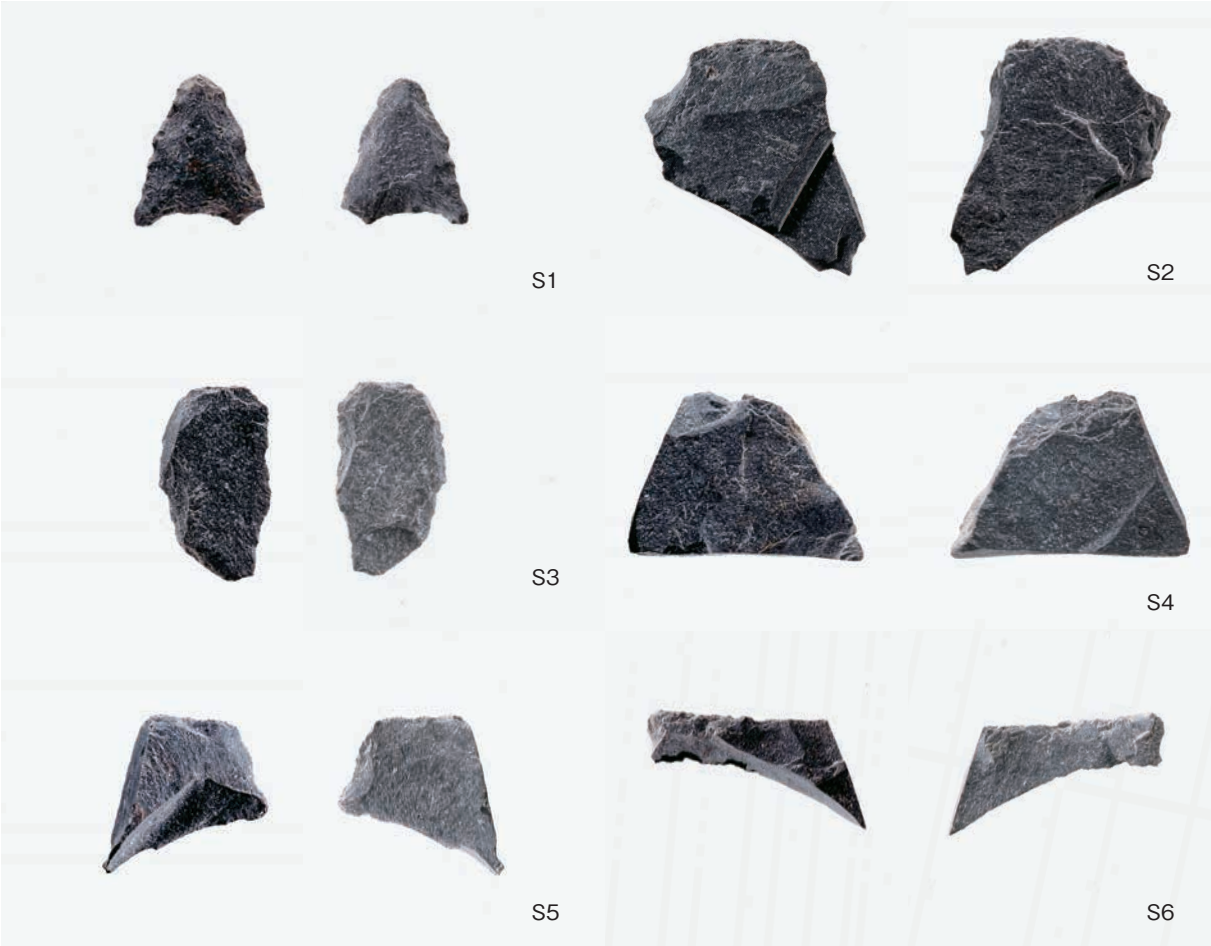
出土遺物（2）

出土遺物（3）



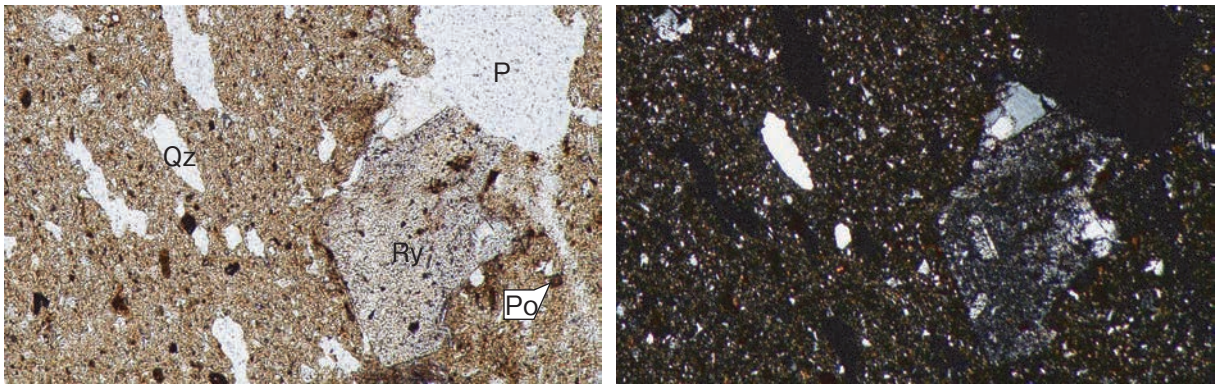
出土遺物（4）

出土遺物（5）

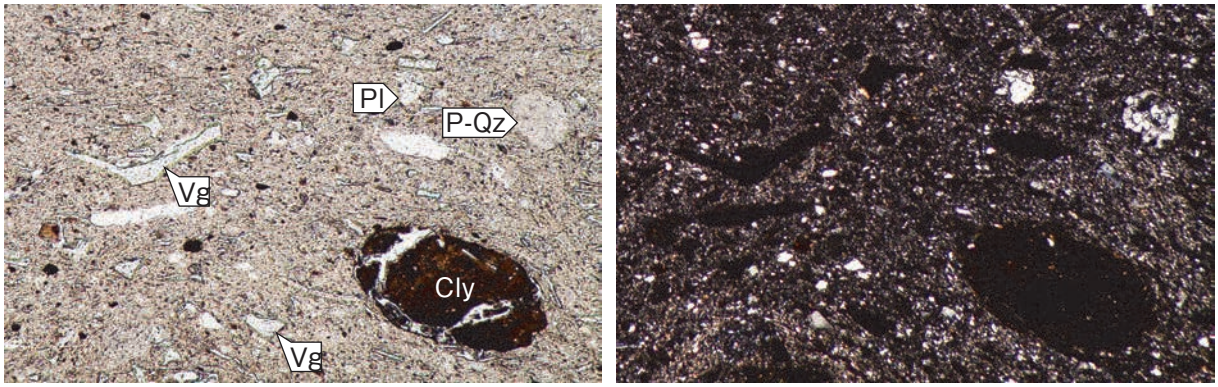


出土遺物（6）

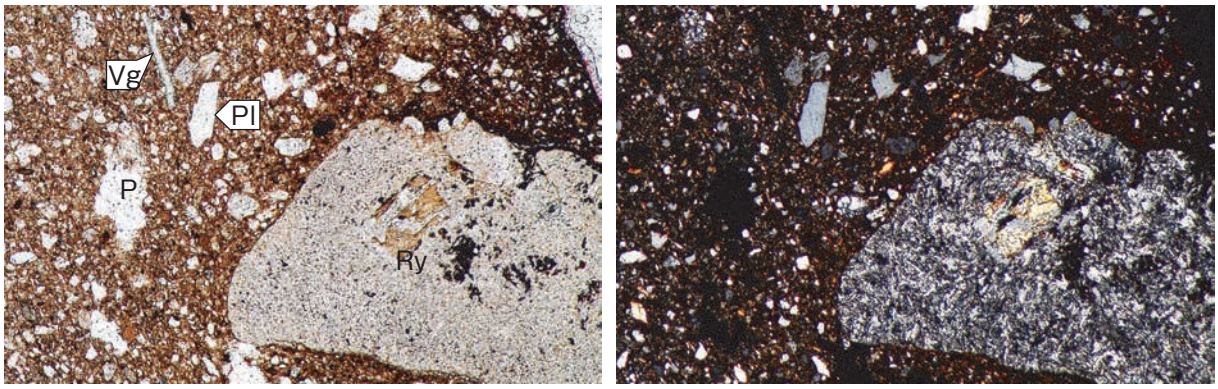
胎土薄片



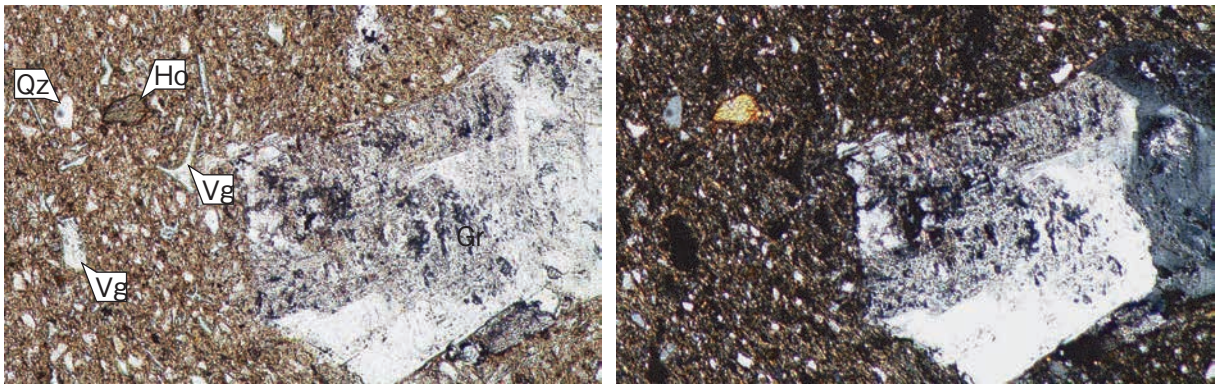
1. No.1（古墳時代初頭　高杯）



2. No.2（古墳時代初頭　製塩土器）



3. No.3（縄文時代晩期　鉢）



4. No.4（弥生時代前期　壺）

Qz:石英．Pl:斜長石．Ho:角閃石．Ry:流紋岩．P-Qz:多結晶石英．Gr:花崗岩．0.5mm
Vg:火山ガラス．Cly:粘土塊．Po:植物珪酸体．P:孔隙．
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

報 告 書 抄 録

ふりがな	おきだいいせき
書名	沖代遺跡
副書名	一般県道網干停車場新舞子線道路改良事業に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第391冊
編著者名	渡辺　昇・パリノ・サーヴェイ株式会社
編集機関	兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部
所在地	〒675－0142　兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1－1　TEL 079－437－5589
発行機関	兵庫県教育委員会
所在地	〒650－8567　神戸市中央区下山手通5丁目10－1　TEL 078－341－7711
発行年月日	2011.3.24

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
確認調査	兵庫県揖保郡太子町沖代	28464	2007093	34°48′34″	134°34′19″	2007.8.20	20㎡	一般県道網干停車場新舞子線道路改良事業
本発掘調査			2009148			2009.5.11～5.20	176㎡	
			遺跡番号					
			450218					

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
沖代遺跡	集落跡	縄文時代晩期・古墳時代前期	竪穴住居跡・溝・土坑	縄文土器・土師器・須恵器	なし

要約	古墳時代初頭の竪穴住居跡２棟を検出した。庄内甕を保有している。縄文晩期の土器も比較的まとまって出土している。

兵庫県文化財調査報告　第 391 冊
揖保郡太子町

沖代遺跡

―一般県道網干停車場新舞子線道路改良事業に伴う発掘調査報告書―

2011（平成 23）年 3 月 24 日発行

編　集　兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部
〒 675-0142　加古郡播磨町大中 1 丁目 1 番 1 号
発　行　兵庫県教育委員会
〒 650-8567　神戸市中央区下山手通 5 丁目 10 番 1 号
印　刷　交友印刷株式会社
〒 650-0047　神戸市中央区港島南町 5 丁目 4 番 5 号